女鑑

明治三十四年六月五日發兌



女鑑第貳百參拾號

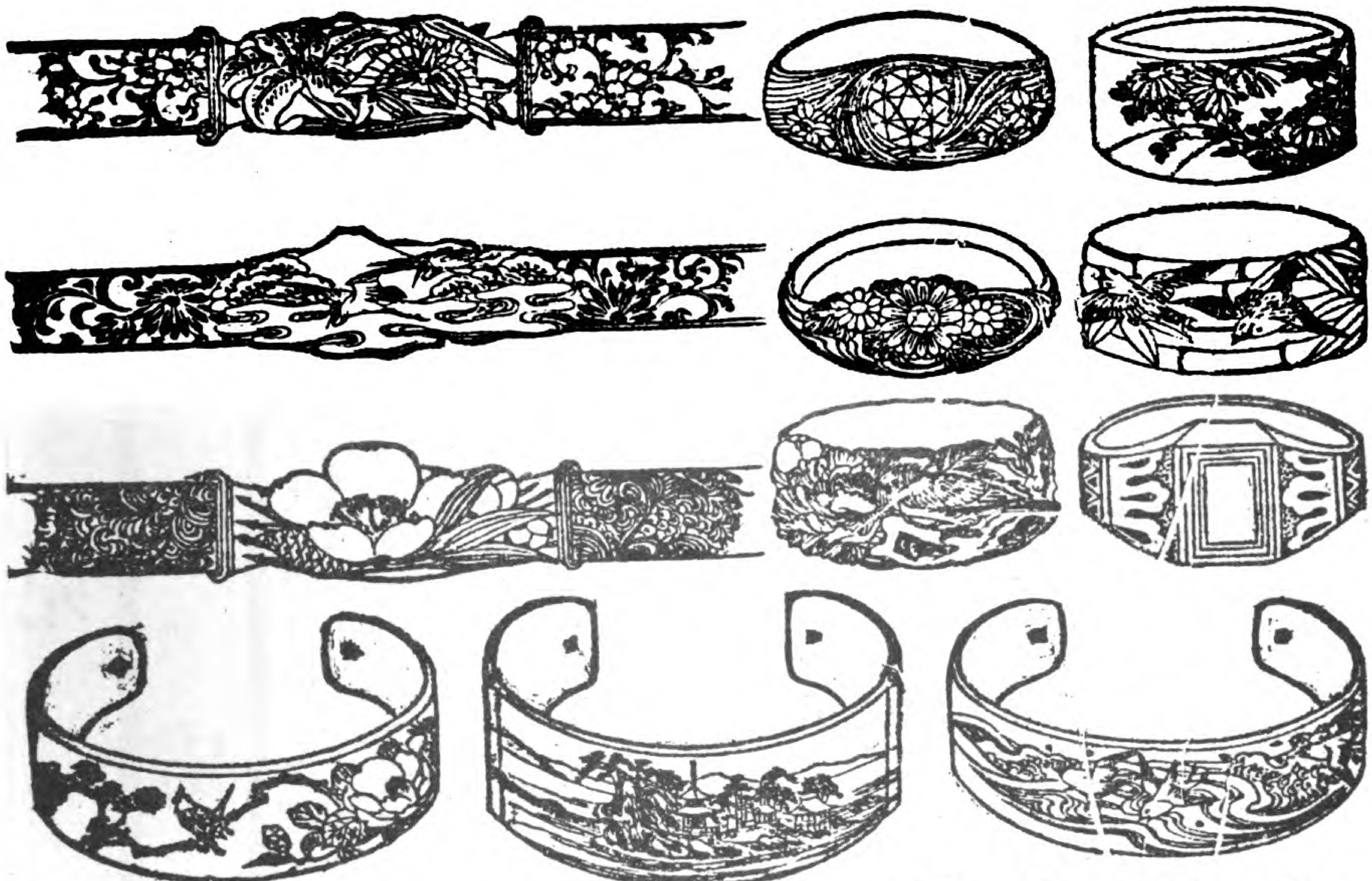
目　録

定價（一册金拾五錢　六ヶ月分金壹圓　十二册半年分　三ヶ月分金（五?）拾五錢　全國無遞送料）

明治三十四年六月四日印刷
明治三十四年六月五日發行

編輯兼發行人　川崎直衛
印刷人　並木眞雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　國光社
發賣元　東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地　靜思館（電話本局一千三百七番）

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價十六圓
乙價十四圓

●廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價廿二圓
乙價十九圓

●廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價廿六圓
乙價廿三圓

●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價卅四圓
乙價廿九圓

●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價卅六圓
乙價卅一圓

●廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價卅八圓
乙價卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價二百五十圓
乙價百八十圓
丙價百三十圓
丁價九十圓
戊價六十五圓
巳價五十圓

●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付角小判形無地印面指環
●廿二圓四十錢

●純金五匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢

外ニ段付模樣付形狀ノ雕刻ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金製高彫繍珍織臺付
甲價卅五圓
乙價三十一圓
丙價廿七圓
丁價廿三圓
戊價十九圓
巳價十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價十一圓
乙價九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻
甲價十四圓五十錢
乙價十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價十九圓
乙價十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價廿圓
乙價十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片彫刻付
甲價廿三圓
乙價廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品種々あり

時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋
區通り二丁目

吉沼又右衛門

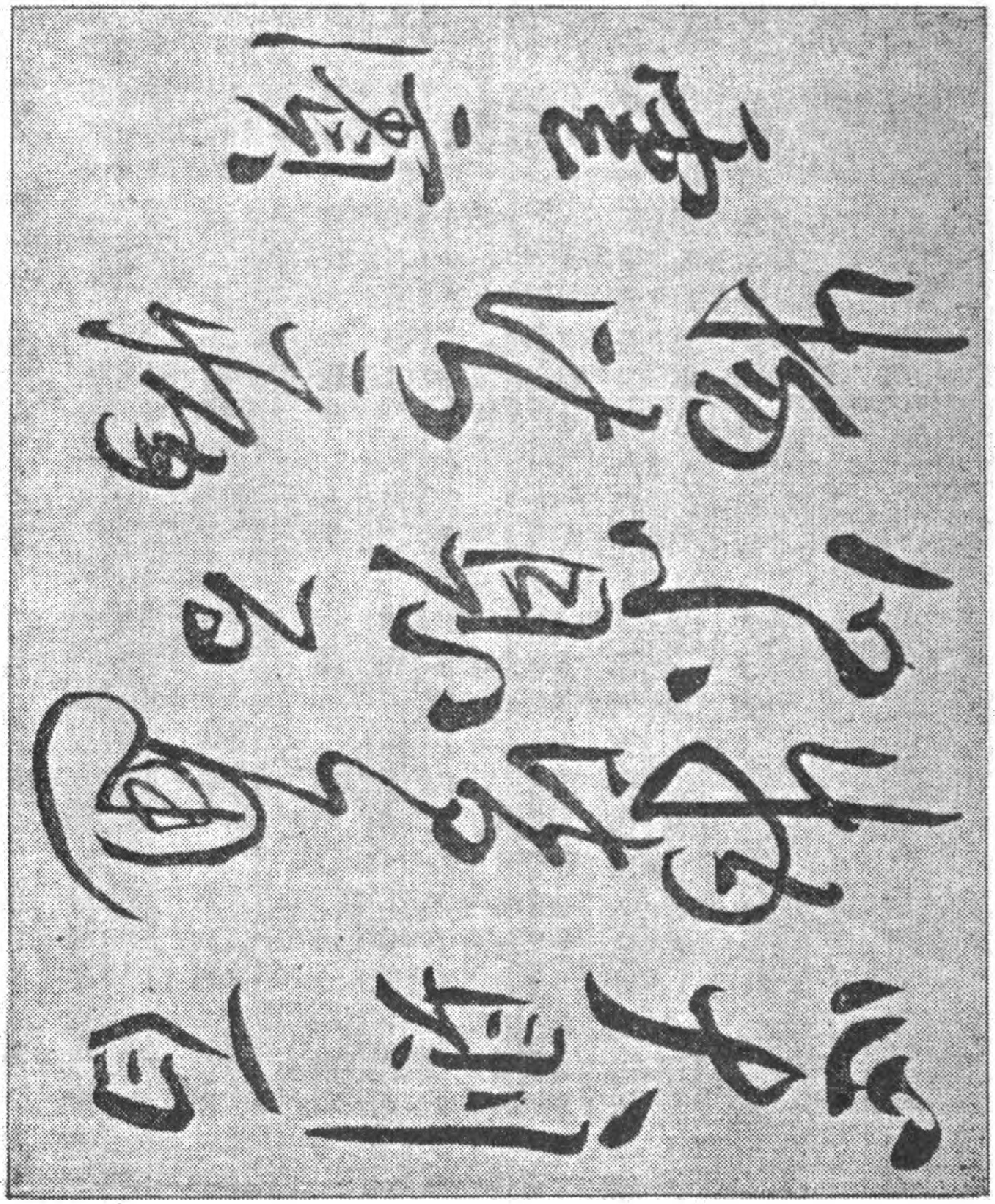
電話本局三十三番
長距離電話接續

渴地部尼子肖像





（積翠觀瀑圖）



慈善につきて

近來、社會慈善の文字を見、慈善を說く人を聞くこと、日に日に、多くなりまさらむとす。これもとより佳事なり。決して、吾人の喙を容るべき所にあらず。然れども、慈善とは基督教徒の獨占にして、西洋文物の輸入と共に、わが社會に植ゑられたりとなすが如きの誤解。一人慈善を叫べば、爭ひてこれに應ずること、一歩も遲れなば、己の耻辱なりとなし、絕えて、その所謂慈善事業の、果してその目的、及手段に於いて、純粹なる慈善德行なりや、否やを顧みざるの輕噪。つとめて己が慈善事業に從事し、賛成し、助力することを、世間一般に告知せしめて、己の慈善心に富むを披露せむとするの僞善。凡べて、かくの如きは、深く、誡めざる可からざるなり。

第一の誤解の如きは、もと無知盲目なるものの囈語にして、深く、士人の辯解を須ゐるべき價値あるものに非らず。第二の輕噪につきては、充分なる反省を促さずむば、往々にして、慈善を目して、世間の惡德となすべき機會を生ずるの恐あ

り。何事によらず、その名を美にして、その實を醜にするは、不徳の至なりと雖ども、慈善を標榜して、一種の私利を經營するあらば、これ由々しき敗徳なり。その罪惡たる、彼の羊頭をかけて狗肉を賣るものにまさること萬々たりといふ可し。かゝる性質たりとも知らずして、輕々しくその名を加ふるは、これ自ら傷つくるものなり、深く思を回らさゞるべからず、若しその弊、未だ如此に至らざらしむるとも、その慈善は、果して、人に對して眞正の慈善たり得べきや、否やを稽査せざるときは、己慈善として行ひたる所、却りて、或は、不慈善となりて、その人を害することなきを保せず。假令ば、詐りて、その身を廢軀に類せしめて、以て、憫を買ふものに對するが如き、詐僞漢の金錢施與を請ふものに對するが如き、妄りに、これに與ふれば、却りて、彼等を正業に遠ざからしむるなり。

その第三僞善の如きに至りては、言語道斷の擧動にして、何ごとも、爲にする所あるは、大に排斥すべきことなるがうちに、報酬を得むがため、交換的に道徳を行はむとするに對しては、わが筆は、これを罵るにだに汚されむことを恐る。

この事、殊に女子に限りたる誡とにはあらざれども、女子は、尤も感情に強きもの、また、近來慈善事業、概ね、女子の企に成るもの多きを以て、殊に、わが諸媛の反省を促さむとはするなり。

論説

人は自立心なかるべからず（承前）

細川潤次郎

人の自立心なかるべからざることは、前號に於て、其の大意を述べたりと雖も、猶、未だ、盡さゞる所あるを以て、一言して、以て之を補はんとす。抑、前號にも言へる如く、自立とは、社會を離れて獨立するの義に非ずして、各人、各個の心と力とを用ゐて、百事に應當すべく、從うて、百事、人に依賴することに制限を加ふるの謂なり、社會の百事は、常に、一人一個にて、應當すべきものに非ず。從うて、人に依賴すべきものなれども、若、此の依賴心に一任して、自立の念慮なきときは、一旦、其の依賴する所の人を失ふに及びては、忽、狼狽周章して、措くことを失し、恰も、盲者の杖を失ふが如くなるべし。縱令ひ、此の如き狀況にまで立到らざるも、惣じて、人に依賴したることは、時日を遷延し易き者なり。事實を誤らしめ易き者なり。且、亦、人に依賴するには、親戚を除く外は、相當の報酬を與へざるべからず。一家の費用を増加すべき者なりとす。若、依賴すべきことの中、自身にて爲し得べき限り、成る丈、自身に之を爲すときは、此等の弊を除くことを得べし。此故に、人には依賴すべきことなから、成る丈、人に依賴することに制限を加へ度き事なりとす。父母、若くは、夫を始め、其の他の親戚は、

平常、其の命令を受け、其の訓誨を聽くが如き、尤、依賴すべき人ありと雖も、生病老死は、人生の免がれざる所なり。離合聚散も、必然の事なれば、時ありては、平常の如く、其の命令を受くることを得ず。訓誨を聽くことを得ざるべし。啻に、尊長、即ち、目上の人の、常に、依賴すべからざるのみならず、同等若くは、目下の人に至りても、亦、常に依賴すべき者に非ず。朋友懇意の人の如きは、諸般の事に付き、相談して事を決すること、世に珍らしからぬ例なるが、其の朋友懇意の人、死亡若くは旅行するが如きことあらば、忽其の相談相手を失ふに至るべし。余が、近來、閲歷したる一例あり。余は、近來、一室を建築せんことを思ひ立ちたりしが、預め、自身は、在官の身にて、工事を監督する餘暇なからんことを慮り、何人にか、此の事を委托せんことを思ひ、幸に、一人

の、余が家の長屋に住居して、某の省に勤仕する者、其の省の營繕の掛にて、多少、建築に經驗ある者を得て、工事の監督を囑托したれども、此の人は、公務を帶びたる人なれば或は指支あらんかと思ひ、更に、一人の、民間に在りて、工事に熟練せる者を雇ひ、若干の報酬を與へ、監督の事を依賴し、是れにて、先づ、萬全なるべしと思ひ、工事に着手したるに、中途に至り、其の一人は、公務に付き出張して、數月返らず。是に於て、兼て、依賴せし工事熟練の人、有用の場合となりて、最初の計畫、圖に中れりと思ひ居たりしが、間もなく、此の人も遠方へ旅行せねばならぬことゝなりて、遂には、余自身に、工事を監督するに、至れり。此如き例は、一々擧ぐるに遑あらざるべし。此同等の人の、常に依賴すべからざる所以なり。其の他、各種の職人の如きも、亦、常に、依賴す

べきものに非ず。職工の如きは、固より、賃錢の爲に仕事を爲すものにて、人の爲に使役せらる丶ことを本務とするものなれども、多數の人の仕事を受合ふものにて、常に、一家の爲に使役せらる丶ものに非ざる故、已れ之を使役せんと欲するときは、恰も、他人の仕事を請合ひたるときあるべくして、當てにあらぬものあり。亦、目下の事なりと雖、常に、依賴すべきものにあらず。下女下男の如きものは、昔より、忠實にして勤勉ある人物は、至て、得難きものあるに、當今に至りては、縱令ひ、人物を選ばざるも、猶、其の人を得るに困む。蓋、近來は、女工の盛あるに由り、從ひて、相當の賃錢を得る道多きにより、婦人の雇に應ずる者、大に、其の數を減じたり。將來に至りては、益々、其の人を得るに難かるべし。縱令ひ、其の人を得るとするも、賃錢の割合、次第に増加して、是までの如く、多數の下女を使役する事を得ざるべし。余が、米國に在りしとき、華盛頓なる日本公使館に雇ひたる下女の、給料を聞きたるに、一ケ月三十弗と曰へり。我國下女の給料は、未だ、容易に此の額に達せざるべきも、其の額の、次第に増加するは、亦、疑ふべくもあらず。下男に至りては、其の賃錢を得べき仕事、從前よりも著しく増加したるを以て、相當の人物を得ること、下女よりも更に難かるべく、且、其の賃錢も、下女よりも、更に、多く増加すべきを以て、是までの如く、使役することを得ざるべし。以上、論せし如く、目上の人も、同等の人も、目下の人も、常に、依賴すべきものに非ずとするときは、到底、自身より外には、一の依賴すべきものなかるべし。自身に依賴せんとするときは、自身の心を十分に用ゐ、自身の力を十分に用ゐて、其の目

的を達せんことを期せざるべからず。是、即、自立心の必要ある所以なり。(結)

婦人の早衰（七）

三輪田眞佐子

慎思録に曰く、記誦はまことに是學者の要務なり。されど、これを記誦するは、須らく、少壯の時に於てすべし。苟も、强壯の時に到らば、强く記誦すと雖忘失して、徒らに、力を勞し易きのみと。信に、學問するには時期あり。そは、腦髓の發育する秋に於ては、腦裡に印象すること易ければ、見るもの聞くもの、悉く記憶し易きのみならず、一旦、知るものは、永く忘れざるべし。

然らば、人は、十年に達するまでの時機を逸失せずして、種々ある學識を畜へざるべからず。然らば、そが、先入主となりて、他日、いよ〳〵深遠なる學理を究むる基礎となるべし。たとひ、これより、家事のみに從事し、更に、讀書の時を得ざる婦人といへども、右の智識は、日常聞見するものを判斷する根據となり、以て、心力の進步啓發する端緒となるべし。然るに、この好時期を遊惰に浪費し、今日は琴、明日は挿花といひて、浮華のことのみに專にせば、當時は、優美の點より人にもてはやされんも、他日、精神早衰の弊に陷るは免れじ。そは、學識ある婦人は、老いていよいよ壯なる觀あるも、無學の婦人は、すべて、五十の坂に達せば、意氣消失するを見て、過言にあらざるを知るべし。蓋し、琴花の道も、學ぶべき時期に修めざれば、上達せざるを以て、これも棄つべきにあらず。

されば、婦人たるものは、少くとも、現今流行す

る、高等女學校卒業以上の學識を具へて、人に嫁し、家事の間を得て、なほ、終身讀書を廢すべからず。されば、精神に、新智識の補給絶えざるを以て、年と共に、益賢明となるべし。などか、精神の早衰する恐あらんや。凡そ、人の弱點は、小成に安んずるにあり。これを以てにや、高等女學校卒業以上の學識ある婦人も、一旦、學校を出づれば、讀書を廢せざるもの稀なり。たま〳〵、文字を見るものありとせば、小新聞の雜報、若しくは、高尚ならざる小説の類に止まるべし。否、かかる婦人は、比較上、なほ、學問を愛する部に入れざるべからざる實然ならずや。

勿論、家事を忽にして讀書するは、好みすべきにあらざれども、中等社會以上の婦人なれば、時を得、折につけて、寸暇なしといふべからず。故に、婦人の讀書せざるは、讀書の暇なきにあらず。讀書の暇を作らざるにあらざるか。思ふに、讀書と家事とは、全然、両立し難きものにはあらず。家政も、衛生經濟及び看護の新智識は、讀書より養ひ、これを、實地に應用するを要するにあらざるか。交際の心得も、讀書にあらざれば得ること能はざるべし。殊に、家庭教育の如き、絶えず讀書せざる母は、その任に堪へざるものといふべし。おのれ、嘗て、知人と鎌倉に遊びけるとき、彼の大塔の宮を幽閉し奉りけりといふ洞穴を見て、轉た感慨の情起り、覺えず落涙しけるとき、知人は、中流の位置を占むる婦人なりしかども、その伴ひし少女が、母君、これは如何なる穴なるかと問ひければ、答ふる辭なきのみならず、おのれが、涙にむせぶを見て、反りて、怪みけるもののごときは、今日、なほ、記憶して忘れず。あはれ。なほ、讀書に志なき婦人は、徃々、家事衛

生經濟などに於ても、これに類すること多からんを以て、精神の早衰するも實ならずや。

故に、精神の早衰を好まざるものは、學校を去る後といへども、絶えず、讀書を忘るべからず。特に、高貴の婦人たちは、身を以て、下等婦人の模範となすべき天職あるべければ、終身讀書を忽にすべからず。高貴の分限にある婦人たちは、讀書の暇なしといふべからず。寧ろ、閑散に苦しむものといふべし。その閑散を利用して、有益なる讀書の樂を作らば、單に、精神早衰の弊を免るゝのみならず、一生の幸福なり。

川崎先生に呈して婦道の一端を論ずる書（承前）

永濳生

第三　庭訓の事

主婦の務といへば、御高著にも見え候通り、畢竟するに、一家和樂の源となるべきことに候。さて、試みに、之を別ちて申さば、奉養、内助、庭訓、家政の四となすことを得べきかと存候。其の中、奉養内助家政の三つは、中編、主婦の心得に於て、懇ろに說き給ひ、今さら遺憾無之樣奉存候。庭訓の事に至りても、其の十八、十九、廿、廿三の條々にて、其の大方は盡くし給ひしものなから、尚、今少しと思ひなさるゝふしのなからずやと、存候。申す迄も無き事に候得共、或る心理學者の研究によれば、小兒が、生後三年間に得る智識は、其の以後、大學の課程を終ふる迄に得るものよりも、更らに、大なりと申す事にて候。斯く迄に、

染り易き素絲は、常に、慈母の膝下にまつはり、朱となり紫ともなるも、母の手一つによることに候へ者、母たるものは、庭訓に於ては、殊に、意を注がざるべからざる儀と存候。去れば、古の賢母が、如何に、此の點に向つて、心を碎きしかは、今更ら、申上ぐる必要も無之、此の所、今一應、御再慮を仰ぎ度存候。

（未完）



愛女のために

（西三條實條の後室より其の息女におくりしもの）

申すまでは候はねども、身もちやさしく、心もおとなしやかに候ひて、さゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで繁昌候て、孫彦をやしなひ、また、我らが行末をも見とゞけはごくみたまへと、打願ひ、筆にまかせ申しまゐらせ候。いづれも、生としいけるもの、この理をしらであるまじう候。

第一、慈悲の心あるべし。人をあはれみ、むしけだものゝ上まで、露の情をかけ、面も、たゞ、柳の風になびくが如く、ものやはらかにして、人の心を汲み知りひかめる心をとりなはし、心のうちは、石金よりもかたく、あだなる事をきらひ、一筋に、心をむけたまふべし。忠臣は二君につかへず、貞女は兩夫にまみえずと、くれ〴〵、このことわり、朝夕、心にかけたまはゞ、神や佛も御守りおはしましまゐらせ候。

第二、まろうどなど御出候はん時、内に無念の事候とて、いさゝか、そのけしき見せ給ふな。何と

なく取なし、はえ〴〵しく挨拶有りたき事なり。高きも賤きも、かけめなく、かは〴〵しく打むかひ、春は花、夏は卯花、秋の月、冬は雪霜、まことに、折にふれたるが、ねんごろにとりなしたまふべし。されども、あまりに、むつましげなるも、よそのみるめいかゞ。たゞ、何となくなぞらへ、かど〳〵しうなく、愛々しく候はん事こそ、あらまほしう候へ。

第三、めしつかひのもの、おろそかにて、何ごとも、おもふまゝならざるときは、ひそかに、よまひごといひかはし、それにても合點なきものは、かどのなきやうに折檻もあるべく候。夫などの見聞たまふやうには、口惜しき事に候。いかほど、うつくしきちご女も、はら立ちたる顔ばせは、見にくきものにて候。ことに、わかき人の聲高にあるこそ、淺ましき事ならめ。さるよまひごとをも、聞き申さぬものにて候はゞ、暇をもとらせたまふべし。さのみ、苦心もあるべからず、男も女も、あまり短慮に候へば、なんむしも出來、めしつかひのものも退屈すれば、よそめもあしき名をたて、後には、逃げうせ申すものに候。ある歌に

みよしのゝ夏箕の川のかはよどに
鴨ぞなくなる山陰にして

とこのうたの心は、よしの川いとはやし。鴨も水のはやき處にて住みがたし。すこしの水のよどむ處にあそぶ。いはんや、人間の身として、はげしき處にはすみがたし。

第四、夫婦の中は、たかきも賤きも、むつましき事こそ、よその聞えも心にくゝうらやましけれ。たとひ、萬代を送りたまふとも、夫に見おとされぬやうに、朝夕たしなみ給はゞ、なは〳〵千秋萬歳をたもち、目出たう御さかえおはしまし候はん。

むねんの事を、さのみ、おもひたまふべからず。たゞ、うき世の有さまをつくゞゝと見聞きたまふべし。心をながくみじかくうち過ぎたまはゞ、末は、よき事あるべし。

つらしとて恨むとだにもおもほえず
　なほ行末をたのむこゝろに

右のうた、聞えたる事におはしまし候。紀の有常が女のうたに、

風ふけば沖つ白波たつた山
　よはにや君がひとり行くらん

龍田山といふは、ぬす人多き所なり。白波といふは盗人の名なり。かやうにある山を、中將ひとりこえたまふとて、ねたむ心はなくして、案じてよめる歌なり。今までの褒美なり。また、最明寺の和歌に、

人のめのあまりりんきのをはりこそ
　ふたりの恥をあらはしにけれ

この理げにもとおもひなならせ候。

第五、我にしたしき人の、すこし遠ざかり候とて、又、こなたも、なほざりに候はん事、非覚のことに候。

つらしとてわれだに人をわすれずば
　いかでか中のたえははつべき

右は、いづれも聞えたる歌とおぼえ侍る。ことに、むつましき異見などは、いかにも、ねんごろにうけ、よきことは、げにもと思ひ、あしきことは、うちすてたまふべし。

少しも、無心がましき色見せたまふべからず。その色見え候はゞ、こたびよりあふ人も候ふまじ。

第六、惣じて、神や佛も、けしからぬやうにうやまひたふとみ、人目にたゞぬやうに、心にある事に候。

こゝろだにまことの道にかなひなば
祈らずとても神やまもらん

第七、人の中にては、いかにも、かろ〴〵とはえばえしく有るべき事なり。しかりとて、あまりくちきゝたるは見ぐるし。男も女も、ものいひ過ぎたるはあし。口はとがのかど、舌は禍のねと申すことの候ふなり。

時鳥人のことばのおほかるは
品すくなしと一こゑぞなく

かれこれ、思ひよりたまふべし。ことに、食事などの時、口をきゝ、よそめあることは、あしきさまにて候。甘きものは虫にわたり、辛きものはむせるものなり。

第八、音曲、歌、連歌その外、興ある座敷にては、いかにも、おもしろきやうにとりなしたまふべし。さりながら、あまりそゞろなるは、いかゞ有るべし。

第九、人のあしきことばづかひ、歌、連歌のをかしげによみしに、あしきとて、いさゝか、そしりわらふことは淺まし。たゞ、何事も、色ふかきやうにあらんこそ、心にくけれ。

第十、よそより、いさゝかのもの來りしとても、愛々しく有るべく候。用になきものとて、つかひなどの見聞候はんに、無下の候はんことあるべからずさりとて、又、つよくうれしげなるもいかゞ。人は、何にても、無心の所望あるまじきことなり。さりがたき事は、所望も所によりくるしからず。それほど、又、あたへもほどこしたまふべし、男女の身もちは、宗祇法師がことの葉、朝夕、心にかけたまひ候うてよく候。いづれも、心得たまふべし。よきがうへにも、さかえおはしませと思ひ、かくのごとく申しまゐらせ候。めでた

くかしく。
あだにのみ人をつらしと何か思ふ
　心にわれをうきものとしれ

湯地丈右衛門の母

田山とり子

熊本にては、近世の君子とよばれ、温厚雅謹一世を薫化せし故元田樞密顧問官をして、純乎眞君子、似㆘如㆓秋實㆒飲㆗醇酒㆖とまで激賞せしめたりし湯地丈右衛門の高風篤行、これを、嚴なる視指に委ね、今更詳説せざるも、猶、之を推知するを得べきなり。

あはれ、斯の德、如何にしてか之を得たる。山紫水明よく偉人を生ずといへり。さては、成長せし其の土地の善かりしためか。あらず。偉人の感化は、よく人をして偉大ならしむとかいふ。さらば、彼は、一世に傑出せる良師を得て學びたりしがために然るか。其もあらず。抑も、天性か。これ、或は然らむ。然れども、彼の斯く君子とよばるゝに至りしものは、專ら、其の心明にして而かも慈愛に富みたる、其の母の感化によれりしものなりとぞいふ。其の多年のこゝろづくしは如何にありけむ。

丈右衛門の母、名を都尾子といへり、本姓佐々氏、十六歳にして、當時、肥後國葦北郡佐敷の里にすまひし熊本の浪士、湯池龍彦に嫁ぎぬ。廿一の時、長女を生み、廿四に、丈右衛門を生めり。初、暉狼と呼びしを、後に至りて、丈右衛門と改めしなりといふ。夫は、あまり俠直にすぎて、あらぬ罪を得て浪々の身となりしばかりの人なるに、これはた、諫めて矯めらるべき性にあらず。いかで、

この兒を、文武の道に通ぜさせ、世に秀でたる人ともなして、もとの祿に復させむと、たゞ、この一途の希望を最愛の兒に繋けて、朝夕いつくしみ育てけり。

六七歳になれる頃より、この里の儒者上林某といへるに頼聞えて、學問せしめけり。同じ里とはいへど、其の間、殆ど、一里近くの往返の送迎は、必ず親しけれど、而かも三四間の後にゆきて近かず。夜になど行くことあれば、却つて七八間も隔行きぬ。かくして、我が兒の心膽を鍛錬せしめたるなり。

斯ばかりの心づくしも、幼き人の心には、いまだ、透徹せずやありけむ。年月のみ徒に流過ぎて、志す學問の道には、一向に進まざりき。然れど、都尾子は、よく自巳の天職を識認れる人なりき。また、僅些の不幸不平のために、わが責務を放擲して、はかなき小安を偸むが如き、薄志弱行の人にはあらざりき。即ち、我が子の教育だに出來ざらば、世に母となりし名をや汚さむと、深く恥ぢおそれ、ます〱、氣を勵まして、わが兒の行末のために心を砕きしが、これよりは、送りゆく毎に、矢立と紙とを懐にしゆきて、上林氏の窓の下にたちて、わが兒に論語を敎へらるゝ師の素讀を、そのまゝ假名文字に記しとゞめて歸りぬ。

さて、復習せしむる時に、例の忘れたる所あれば、その紙をおしひろげて、斯々ぞと、懇にさし示しければ、はじめて、母の用心の淺からぬに、いたく感激し、これより、一筋に學問に心を傾けしかば、遂には、その蘊奥をも極むるにも至りしとぞ。

都尾子は、また、わが兒のために、友を撰びたり。されど、邊僻の地惡俗汚習のみ蔓りて、善良なる

朋友を求むること能はざりき。さりとて、閑寂無爲は、到底、兒童をして飽かしむるなきこと能はず。彼の兒は、遂に出で、惡友と交れり、心おろそかならぬ、母の訓戒も、以て、彼をとゞむること能はざりき。都尾子は、一日、丈右衛門を具して、家の後なる山林に入りぬ。さて、言ふやうは、

士の身として、斯る邊僻の地に漂浪ふだに、いみじき家の耻辱なるに、其を雪がんとも思立たず。惡しき友と交りて、更にまた、其の耻辱を大にせむとするは、如何なればぞ。母が年ごろの心づくしの萬一を知らば、少しは顧みるところあるべきを。とてもかくても、家の名をますく下すべきを知りながら、最愛しとて宥しおかむは、祖先に對して憚なきにあらず、われも死なむ。汝も宥さじ。

と、持來たりし脇指を拔きて、わが兒に向ひぬ。丈右衛門も、今更、わがあやまちの斯くまで母を怒らしめし罪のおそろしさに堪へ得で、たゞ泣きてのみありしが、やがて、つゝしんで其の罪をわび、せめては、自ら死にて謝せむと、其の脇指を乞ひければ、都尾子は、其の眞實なるを察し、よし然らば腹を切るべし。しかしながら、しばらくは、母が其の腹みづからむぞと、刀を収め、なほ、さまぐ言論しければ、これよりは、其の行状を愼み、あつぱれ、人の龜鑑とせらるゝまでに行遂げきとぞ。

（未完）

世の中に思ひあれども子を戀ふる
おもひにまさる思ひなきかな

紀貫之



家政

仕付方

赤堀又次郎寄贈

十八　宵のまの事

宵の間などには、かまひてかまひて、一日みやづかひせさせぞおはしまし、または、世のあつかひ何くれに、御くたびれ候ふとも、ちと、御心をしづめて、あすのことをも思召しわけられ候へ。さのみ〳〵、くるれば、ねんとあり、思ふことは、うたてある事よと、いかにも如何にも、よのしきあるべきかぎり、しづかに、御思案あるべきか。童のおきて文どもにも、ゆふべには、あしをあらひて、きもを安んぜよと見えてさふらふなり。

十九　夕暮の事

夕の空などには、おほとの油もまはらで、いまだ、たそがれの程などには、必ず、こゝろあるべき泉水、つき山もとのふかゝらむこずゑなどに、御心をとどめ候へ。日もいりあひの鐘の聲などには、ことにうゐむじやうを知らするわざにて候。御心得候ふべし。ともすれど、あけくるゝまゝに、りんしゆのゆふべ近くにこそと、よく〳〵ごしあんあるべし。

廿　御けしやうの事

御けしやうなどせさせ玉はゞ、いかほども、みいれうつくしくにほひ、やがて、きよらかにさせおはしまし、おどろ〳〵しく、きはやかになどあるまじく候。如何にも如何にも、目にたゝで、さすがに、うつくしくさせおはしまし候ふべし。

婚禮御色直式

有住常子

すべて、色直の式とては、夫婦契約濟の上の、宴會も、とゝのひたる後に、平常の食膳其の他のつとめにつくの初の禮なり。故に、禮服を、双方とも着改めて、其の式をあぐる、是を、色直しといふは、禮服は、すべて、白色なるを、織色染色の服に改るの由にて、名づけたるなり。

然れば、禮服をぬぐわけにて、袴を用ゐしも袴をぬぎて用ゐず。其の他、これに順じて、畧して、平常の服裝に、髮も共に結び直すべし。

色直の膳部

色直の式に用ゐる膳部は、上中下にて、何程も、しつらひかたあるべし。只、平生の調理と替りたるは、契り子餅を參らする事なり。

其の一端をいはんに、嫁は、男より給ふ色直小袖をきて、待女房(畧には仲人の婦人)其の他、女中も、色を直して、聟は嫁よりの土産小袖をつけて、座につくなり。

其の時に、膳部を出す。一番に契子餅とて、餅を土器に甲立して盛り、又、畧には、汁椀にも盛りて、向菜に、二種、數の子、卷鰑をもり、又は、赤粉白粉を附けて進むるなり。

これより、吸物を參らせ、次に、本膳二の膳を進むるなり。

上巻結び

石井泰次郎

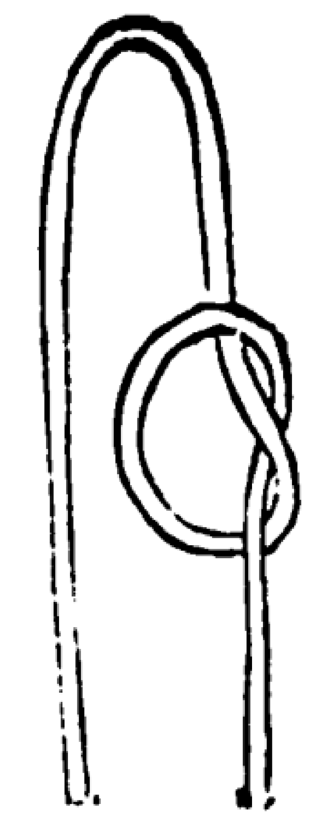
(四) 同一種 人形(ヒトガタ)

兜の總角、鎧の總角、すべて、武具に用ゐる總角は、人形を用ゐるなり。(小笠原流即松岡氏傳書)かく見えたるは、近き世の新作物にして、正しからぬ結形なり。さ

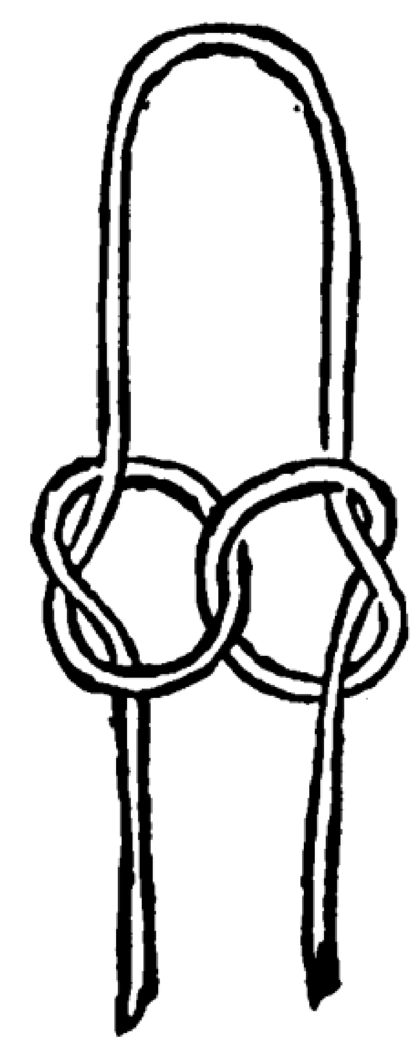
るを、今、なは、正しき物の如く用ゐる者のあれば、正しからざる由を示さんがため、此にあげおくなり。

結びかたは、正しき方を、左右を右左と替たるにて、結びたる中の、人字形になるまでなり。

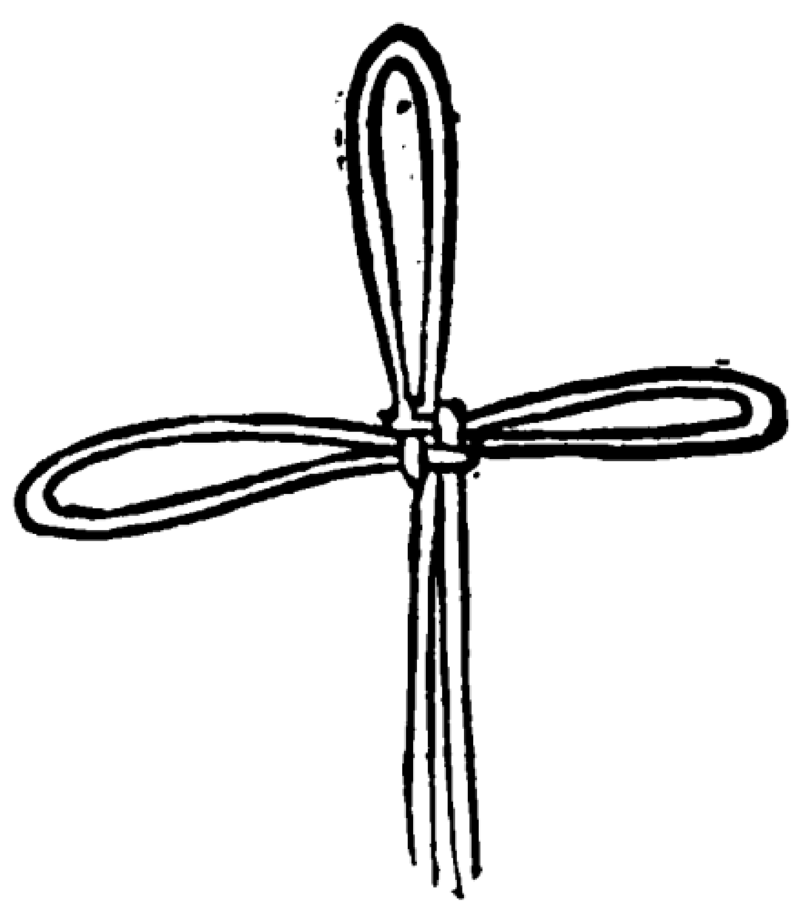
同一種人形（ヒトガタ）第二圖



第一圖



第二圖



第三圖

たちぬひ

羽子板をしゑ

西山たひ子

寶船（つゞき）

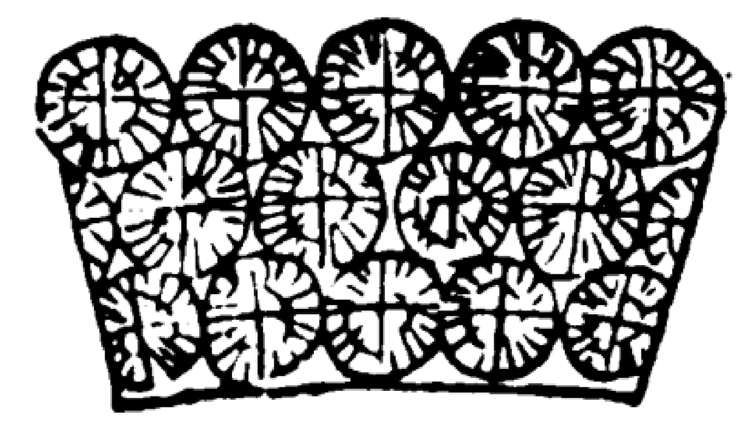
俵

俵は、羽子板の、柄のくりぬきし上より、五分ばかり上りたる所より、二寸ばかりの長さを、羽子板の大きさに合せて、まづ、厚紙を切り、その上の方を、

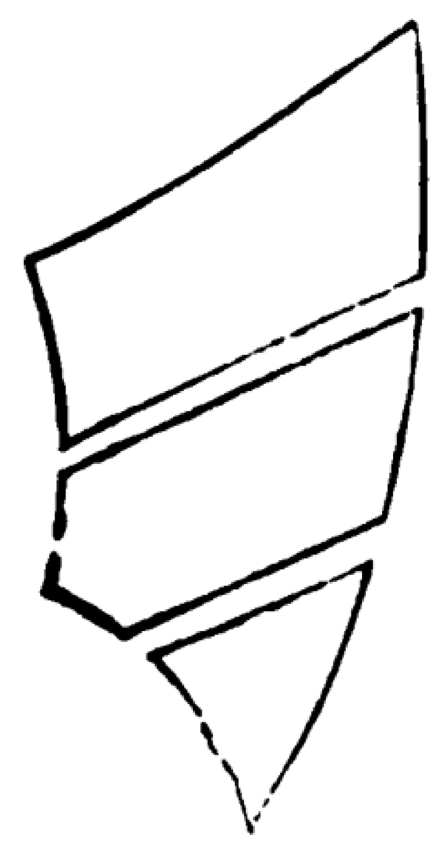


圖の如くに切り、之に、綿小許を入れ、白か、黄等の切にてはり、左の如く、俵をつみたる圖をものすべし。

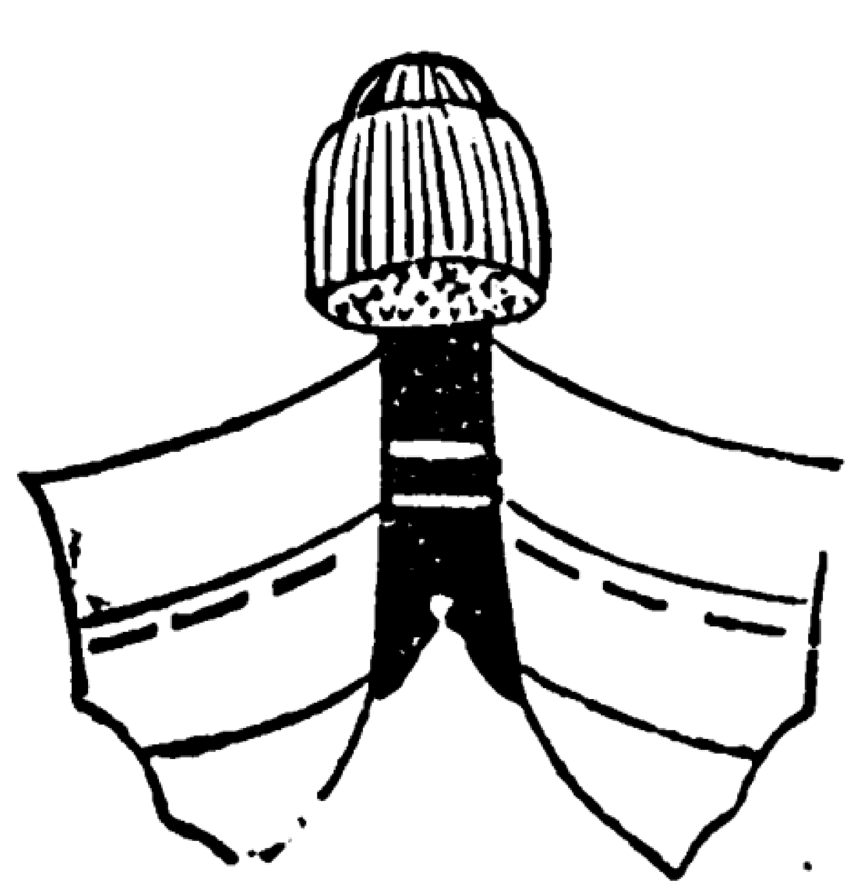
その圖



之にてまづ、寶のみは出來上りたり。之より船なり。



船は、右の圖の如く、羽子板の柄、一つくりぬきたる所より、上に合せて、圖の如きものを左右、二つづゝつくるべし。イ印と、ロ印のものには、綿ふくよかに入れ、ハ印のものには、綿を入れず。黄にても、黒にてもはりつけ、その柱は、やはり、柄の最初のめぐりある上より長さ三寸餘。巾は、下の方は、その柄のめぐりある所にあはせて、大方一寸二三分にし、上は、五六分程に、よき軸のよき格合に作くり、前につくりたる左右の船を、イの下にロ、ロの下にハをくみ合せ、左右とさやうになして、この柱の下に合すべし。即ち、左の圖の如くなり。但し、柱には、左の圖にある如く金紙にはりつけてかざるべし。又、其の柱の上に、黒ちりめんやうのきれにて、蜂の巣の如きものをつくりて、付けるべし。左の圖を見よ。



黒き所は金紙の印なり。

だいどころ

煎鳥

鴨、家鴨、鶏の類の肉を、能程にきり、取合せの野菜は、筍、牛房、慈姑、獨活、蓮根などの類をゆで置き、鍋に脂肪を塗り、鳥肉をいれ、胡椒をふり、かきまはし、八分通り煮えたる時、皿にとり置き、又、鍋に脂肪を塗りて、野菜をいれ、少しいりたる處へ、前の鳥の肉をいれ、味淋醤油にて鹽梅し、煮あげて、鍋をおろしぎはに、花がつをいれ、能くかきまはし、器に盛りて出すべし。

のぶすま

鶏の肉を、こまかにたゝき、ざつとゆがき、鯛を、さしみのごとくつくりて、熱湯をかけ、鮑を薄くきりて、ざつとゆがき、鰹節の煮汁に、味淋醤油を加へ鹽梅し、前の三品をいれ、かきまはしながら煮る時は、鳥と鯛との肉は、こまかくふりて、鮑の、袋のごとくなりたる中へ、はいるなり。それを、靜にとりて器に盛り、山吹鶏卵をかけて出すなり。山吹鶏卵は、鶏卵を湯でゝ、黄身ばかりを、裏漉にて、こしたるものなり。

鯛飯

新鮮なる鯛の鱗を去り、能く洗ひ、三枚におろし、腹部の骨をすきとり、皮を去り置き、骨を煮出したる汁にて、米を仕かけ、飯を焚き、火をひく前に、兩肉を、飯の上にのせ、飯出來上りたる時、其肉をとりいだし、細かくむしり、布巾につゝみてもむべし。能くもみて、飯に交せ合す。かけ汁は、鰹節の煮汁に、醤油加減すべし。加益は、おろし大根、淺草のり、唐がらし。



國文學講義

紫式部日記講義（十四）

井上頼文

九日、きくのわたを、兵衛のおもとの、もてきて、『これ、との丶うへの、「とりわきて、いとよう、おいのごひ、すて給へ」と、のたまはせつる』と、あれば、

　菊のつゆわくるばかりに袖ぬれて
　　花のあるじに千代はゆづらん

とて、かへし奉らんとするほどに、「あなたにかへりわたらせ給ひぬ」と、あれば、ようあさにとゞめつ。

釋義

○九日　九月九日なり。

○きくのわた　菊の花に着せたる綿にて、香を、しみこませ、その香を賞翫するなり。こゝは、道長公の御家なる、菊に着せたる綿を、九月九日に、その香を賞翫せよとて、式部にたまへるなり。

○兵衛のおもと　兵衛は、女房のよび名なり。扶本、類本、村本、岸本等には、兵部に作る。おもとは、御許といふ事にて、敬稱なり。

○これ　菊のきせ綿をさしていへるなり。

○との丶うへ　道長公の北方、倫子なり。倫子は、一條左大臣雅信公の御女なり。

○菊のつゆわくるばかりに云々　この歌は、古今集の、露をわけて、仙宮にいたれる歌、

ぬれてほす山路の菊の露のまに
　いつか千歳をわれは經にけん
と、あるを、思ひよせてよまれたるなるべし。
新勅撰集の賀の部、また、紫式　集には、
　菊の露わくるばかりに袖ぬれて
とあるを、
　菊の露わかゆばかりに袖ふれて
とあり

　譯解

九月の九日、菊の着せ綿を、兵衛のおもとといふ女房が、式部の部屋へ持ち來りて、
これは、道長公の北の方の、別段あるおぼしめしにて、仰せあそばさるゝには、
　此の綿にて、別して、よく、衣服をで香撫、を移し、充分に、其方(式部)が身に積るべき、老いを、ぬぐひ捨てよ
と、仰せられたり。
と、いふことであれば、かしこくて、
只今、菊に着せたる綿をば、くだされて、
　これにて、よく、衣服を撫で、香を移し、身に積るべき老いを拭ひすてよ
と、の、ありがたき仰せをうけたまはり、その深きおぼしめしの、ありがたさに、チャウド、山路の菊の、露けき中を、分けて、通りたるやうに、ありがた涙に、袖をぬらしましたによりて、今、わらはが身は、この賜はりたる、菊の着せ綿の香にあやかりて、千代も經ぬべき身となり侍りぬ、それゆゑ、わらはが經べき千代をば、菊の綿たまはりたる、御よろこびのため、その菊のあるじなる、殿の北の方に、わらはが、
　しめたる、千代を、御ゆづり申しあげん
と、いふ歌をよみて、御禮を申しあげんとするう

ちに、
御使は、はや彼方へ御かへりなされぬと、いふ人のあれば、今は、御返歌も、不用となりて、そのまゝ、手許に留めおきつ。

漢文和譯

節女お正の傳

これは頼山陽先生の作にて、先生の作中にも、ことに意を用ゐてものせられたりと見ゆるなるを、譯文いと拙くて原作の文意の、萬がひとつをさへ寫し出すことあたはざるは、深く慚愧にたへず。されど、今はた、いかゞはせん。譯者が作文修錬の一端とも看、ゆるしたまへかし。

稲村眞里

余西の方筑紫に遊ぶとて、赤間の驛を過ぎつるに、其處にはたゞ、瓦屋茅店その數數十ばかり、山に依り、森に傍ひて、けしきいとも寂しげなるを見しのみなりき。既にして、博多にやどりて後、かの驛に節女のありしことを聞けり。今博多の松永子登といふ人の、余がために説かれたるまゝ、をしるさん。

（原文）余西遊レ筑。過ニ赤間驛一。見ニ其數十家。瓦屋茅店。依レ山傍レ樹。烟火蕭條一。而已。既而寓ニ博多一。得レ聞ニ驛有ニ節女一。博多人松永子登爲レ余説甚詳云。

その節女といふは、名をお正といへり。その父は、七兵衞とて、農を業とし、又、酒を醸して、家すこぶる豊なりけるが、二たびまで妻を娶りけるに、皆先だちて身まかりぬ。前のも、後のも、おのおの

一女を生めり。お正は後妻の出なり。はじめ、七兵衛五十歳にて、その家を外甥なる七左衛門に讓りて、おのれは、別に家を營りて、そこに住みけるが、病にかゝりて、今はになりて、一族を聚めて之に囑みていはく、わが命は旦夕に終りぬべけれど、男の子といふものなく、唯二人の女ありて、公等を煩はすのみなり。願はくは、嘉右衛門を養ひとりて長女に妻はさん。次女は、そのひとゝなりたらん後、之を宗家なる長二郎に妻はさんといふ。嘉右衛門といへるは、七左衛門が後妻の弟にて、長二郎といへるは、七左衛門の子なり。されば、親族相はかりて、その言の如くに、長女を嘉右衛門に配して、これにお正を育くましめぬ。

（原文）節女名阿正。父曰二七兵一。業レ農。又釀レ酒。家頗豐。二娶レ妻。皆先死。各生二一女一。節女後妻出也。初七兵年五十。讓二其家於二外甥七左一。而別營レ舍老焉。及二病篤一聚二其族一囑レ之曰。吾命在二旦夕一。而無二丈夫子一。唯有二二女一。以累二公等一。願養二嘉右一。妻以二長女一。至二次女一。待二其長一。妻二之於二長二一。以承二宗家之緒一。嘉右者其後妻弟也。長二者七左之子也。親族相計如二其言一。以二長女一配二嘉右一。使二之子一育二阿正一焉。

お正は、天質うるはしく、嘉右衛門夫妻に事ふること甚謹めり、嘉右衛門は、性質無賴にて、事を事ともせず、その村の馬醫なる萬助と共に、日日酒に醉ひゝたりつゝ、義父より與へられたる田地など典して、はと〳〵つくしぬ。親族のものどもこも〴〵規むれど、耳にも入れず。この時、お正は既に長じて、長二郎もまた弱冠になれり。長二郎は、人となりすなほにして、よく事に勤むるものから、連に災患に遇ひて、家產やゝ傾きたれば、はか〴〵しくは婚禮をなさんともせず。

(原文)阿正天資濃粹。事㆓嘉右夫妻㆒甚謹。嘉右性無賴。不㆑事㆑事。日與㆓其村馬醫萬助㆒飲㆑酒沈湎。與㆓義父所㆑與田業㆒。殆盡。親族交規㆑之弗㆑聽。是時。阿正既長。長二亦弱冠。長二爲㆑人質直勤愨。而連遇㆓災患㆒。產稍落。是以因循未㆑成㆑婚也。

赤間の隣邑に勝浦村といふあり。村長半五といふは、家はなはだ富めるが、その頃、その子源五がために婦を擇びて、いまだ得ざりけるを、お正が才恰く姿美しと聞きて、いかで、之を吾が家にとおもひたるに、會、萬助事ありて來あはせければ、その意を知らすれば、萬助竊に思へらく、われこの事を成しおほせなば、此の翁の力を借ることを得べく、さては、何事にまれ、欲するがまゝにならんとおもひて、遂に諾ひて、歸りて、さて、これを嘉右衛門に語りぬ。嘉右衛門大いに喜びて、親族に謀らずして之を許さんとす。親戚來りて、その利欲に迷ひて、舊約に違ふことを誚む。嘉右衛門これを患へて、次の日の朝、萬助を召びて、しかじかと語るに、萬助、さらば、之を愚兄道全に謀り見んとて、道全を呼ぶ。道全いはく、此處の村長善次は、かの半五と同じき職にありて、親しき交あれば、かれに媒託みて、おはやけだちて申し入れなば、やつばらなんでふよく拒まむといふ。

(原文)赤間隣邑曰㆓勝浦村㆒。村長半五家甚富。爲㆓其子源五㆒擇㆑婦。未㆑得。聞㆔阿正有㆓才姿㆒。欲㆑獲㆑之。會萬助因㆑事來㆓村中㆒。語以㆓其意㆒。萬助心竊計。吾苟勾㆓當此事㆒。則借㆓此翁勢力㆒。何欲不㆑成。遂諾而歸。語㆓之嘉右㆒。嘉右大喜。欲㆘不㆑謀㆓親族㆒而許㆖㆑之。親族來誚㆘責其違㆓舊約㆒而規㆗新利㆖。嘉右患㆑之。其明。召㆓萬助㆒語㆑故。且曰。爲㆑之何如。萬助曰。請謀㆓之愚兄道全㆒。呼㆓道全㆒。至。

畫策曰。本村長善次與半五聯職親善。託以謀介。使公然來請。奴輩何能相沮也。

嘉右衛門大いに喜び、萬助をして、潜に行きて意を通せしめつ、善次も諾ひて、偕に來たれば、とにかくかたらひ決めて、すなはちお正を呼びて、事のよしを告げて、利害を諭しぬ。お正默然として答へず。やゝありていふやう、諸君のわらはのために計りたまはること、わらはいかでかあだに思はん。されど、亡き父上の臨終に、御枕邊に呼ばせたまひて、わらはを長二郎ぬしにと許したまひしを、その慈しき御心いかでか背きはべらん。如何なる事なりとも、かたぐ\のおほせのまゝに從いはべらめど、獨この一事のみはとて、涙ながらにうちわぶれば、道全等大いに怒りて、われ等が說くところは、たゞそなたのためのみならず、義父の利にもあれかしとこそ計りつれ。われ等にさへ榮耀のあるなるを、かゝる福を舍てゝ、見るだにかひなき長二を慕ふこそ、いたくも顛倒したるものかなといへば、嘉右衛門もまた罵らく、汝が此の婚を肯はぬは、ゆゑこそあらめ。意ふに、汝は、已に密に長二と通せるならん。余かならず汝等二人を逐ひ出さんといふ。お正は頭を低れてものいはず。萬助は、かくありては、くだくだしく何をかいはん。すみやかに吉日を撰みて結納するにしかずといきまきて、善次をして曆を閲させて、なにがしの日ぞ吉けんとて、その夜一夜酒うちのみてどよめきぬ。

（原文）嘉右大喜。使萬助潜往投意。善次許諾。偕來決議。乃呼阿正告之。說以利害。阿正默然不答。良久曰。諸君爲妾計。妾寧不銜。雖然。阿爺臨沒撫妾。而許之二郎矣。慈心所屬萬不可背。百事唯命。此獨不能從。涙

與レ言倶下。道全大怒曰。吾輩所レ説。不二唯爲一レ卿。計レ利二於義父一。施及二吾輩一。與有二榮耀一焉。舍二此洪福一而慕二落魄之長二一。顚倒之甚。嘉右又罵曰。汝不レ肯二此婚一必有二緣故一。意汝已密與二長二一通也。余必逐二出汝二人一。阿正低レ頭不レ言。萬助曰。事已至レ此。何必喋々。不レ如二速涓レ吉納一レ幣。使二善次閲一レ暦。曰。某日吉矣。於レ是。衆歡飲徹レ夜。

お正は、片隅に向ひて、聲も立てずたゞ泣き悲しめるが、これより後は、髪をも梳らず、身をも粧はねば、變もやあるとて、一家心をゆるさず、更る更るうち守れり。さて、數日ありて、お正にはかに、事ありつとは更に見えぬまで、涙を收めて、やゝ髪つくろひ、面を洗ひて出で來ければ、其の志改まりぬとおもひて家には防護やゝ解べり。お正間を窺ひて、沐浴して装束とゝのへて、

屋の後なる炭廠に入りて、厨に用ゐる刄に咽を貫き、兩手を膝にして、うち伏して死につ。時に齢は十八。義母、ふと、その家に居ぬことを覺りて、これを隣家に伺へば、近ごろ久しく見まゐらせずと答ふ。家に歸りて周く搜せば、血流れて淋漓たるを見出で、驚くことおほかたならず。

阿正向レ隅飲泣而已。自レ是梳粧皆廢。家慮二其有一レ變。更守レ之。既而數日。阿正忽洒然收レ涙。稍理レ髪靧レ面。家意二其改一レ志。防護寢解。阿正乘レ間。沐浴裝束。入二屋後炭廠一。以二厨刀一貫レ咽。兩手據レ膝伏而死。時年十八矣。義母方識。覺二其不一レ在。詗二之隣一。隣曰。近久不レ見二二姐一也。歸レ家周搜。遇二流血淋漓一。大驚。

和畫信通講義（第十一回）

山崎彩峨

これを畫くには、符號の順に、花を畫き、のち枝葉をつくるなり。かくて、墨畫にては、白色は、たゞ、花の輪廓をとりしのみにて、花蔕を附するなれども、色あるものは、通常の淡墨のさきへ、濃墨を附して、没骨に畫き、乾きし後、濃墨にて、花心花粉を入るゝなり。されど、墨にては、深紅色淡紅色の別をなすことなく、たゞ、没骨に畫けるは、深紅色、或は、淡紅色の花なりと、観る者が、想像の見解を下すならはしなり。また、その花蔕は、紅白いづれの花にても、濃墨にて附し、枝葉は、淡墨に、濃墨を附して、畫くなり。また、顔料なれば、白色は、直ちに、胡粉にて畫き、乾きて後、黄がち青色の隈を入るゝか、または、胡粉にて、勾勒に畫くか、いづれかによるべきなり。色あるものは、通常の薄彩色なれば、臙脂を濃淡適合の量にとき置き、それを胡粉を含めし筆のさきへつけて畫くなり。花心は、單に胡粉にて畫き、花粉は、雌黄にて、ときたる胡粉にて畫く。花蔕は、通常赭墨なれど、または少しばかり臙脂を和して畫くこともあり。されど、意匠畫は、概華麗を主とするなれば、花心花粉花蔕の別なく、一様に朱を使用するもよし。枝は、淡き赭墨を、挾墨になして畫く。葉は、實物の色に從ひ、通常の草色か、黄がちの青色か、または、これに代赭を和したるものなり。もし、紅色を含めるときは、代赭を和したる色を含めし筆先へ、臙脂を附して、畫く。最も意匠畫なれば、通例、紅色を含有せしむ。


沒骨
眼
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
廿二
廿三
廿四
廿五
廿六
廿七
廿八
廿九
三十

家計簿記法講義

磯部武者五郎

（一）緒言

私は、今回、女鑑記者の依賴に應じ、家計簿記の概略を述べ、貴夫人令孃達の參考に資することに致しました。然るに、家計簿記のことは、また、我邦にて、充分進歩せざる簿記法でありまして、帳簿の種類、記入方法等、殆んど、一定したる樣式がなき上に、簿記法を用ゐる家庭も、極めて少く、我邦の家庭に用ゐる簿記法は、如何なる仕組になすべきものなるか。當分研究中のことゝ申すべければ、此の學科につき講述致すのは、誠に、困難のことであります。さりながら、西洋簿記法の進歩は、到るところ、我邦の計算界に歡迎せられ、政府公署より、銀行會社私立の團体、其の外商館商店工場等に至るまで、皆、從來の大福帳的の記入法を廢して、簿記法を用ゐる樣になりましたから、銘々の家庭に於きましても、遠からず簿記法を採用する必用が迫ッて來ませう、必要が迫るのみならず、現今、我邦の家庭は、計算記帳の事が一番整理して居りませぬ。其れ故、家計簿記の事は、女子教育の上につき、最も、奬勵せねばならぬことであると思います。

さ樣のわけですから、今回、女鑑記者より、私に、家計簿記の講述を御依賴になりましたのも、御尤ものことゝ思ひまして、私は、前に述べたる困難も顧みず、研究も充分致しませぬのに、大膽にも引請けまして、是より、講述を始めます。此の講述を致すについては、二つの目的があります。其の一は、先づ、簿記法の要旨、方法につき、原理原則を述べて、貴夫人令孃達に、其の概要を知得

せしめられむことを主とし、二つには、私の考案せる家計簿記法を述べて、其の實施せられむことを主と致します。

私の考按せる家計簿記法といひますと、甚だ、大げさでありますが、私の、常に、考へて居る簿記法は、幾分か西洋式に則り、從來民間に行はれたる記帳法を參酌し、且、尤、現今中流の家庭に於ける經濟の度程を考へ、其の計算に適合せる樣に仕組みました計りのものであります。

右樣の目的を以て、講述を始めますが、先づ、是より普通簿記法に於ける要旨、方法等に於ける原則の概略を述べます。

（二） 簿記法の主旨

簿記法の主旨は、吾人日常の出納收支を嚴正明瞭に記載し、計算を爲すに在ります。計算の事は、又、之を會計とも申しまして、簿記法は、會計の記錄法と申しても宜しいのです。扨、此の出納收支は、單に、金錢計りのことではなく、金錢、物品、勞力等、價の有るものを、一切含で居ります。此の事は、別に說明致します。さて、此の嚴正明瞭なる記帳は、如何なる効能があるかとなれば、先づ、第一に、不法の收支出納を矯正することが出來、又、不當の計算を發見することが出來、經濟上の秘密を隱蔽することを許ないことが出來、又、大に、勤儉の美德を養ふ方法が立つ等のこと、枚擧に暇なき位のものであります。

政府、若くは、銀行會社の會計は勿論、嚴正明瞭なる記帳を要することは言ふ迄もなく、一人一家の會計にても、嚴正明瞭なる記帳を要すべきは、當然のことですから、簿記法の大切なることは、最早明であります。

（三） 簿記法の種類（單複の區別）

簿記法に、二つの區別があります。即ち、單式と複式の二つです。日常記帳の上につき、此の二式は、必要缺くべからざるものです。されども、今日では、單式は追々衰へて、複式が、専ら盛に行はれます。單式と複式との區別を、ざつと申しませは、單式とは、出納收支の一方のみを記し、複式とは出納收支につき其の價の双方を記すこと、即ち、一つ事を二重に記載する法であります。
複式の簿記法は、總て、出入せる者の價を知ることを待て、事業の成績を集め、損益を見ることを得る便利があります。大きな商店、又は、大きな身代の家にては、複式を用ゐるが宜しく、殊に、銀行會社にては、勿論、複式に據らざれば、營業の損益を見ることは出來ませぬ。故に、複式の盛に行はるゝ次第であります。併しながら、記入に手數が係り、甚、混雜して、覽る時に注意を要しますと、多少、簿記法の智識を備へて居る人でなければ、一寸と覽るのに困難しますのが、缺典と申しても宜しうありませう。單式簿記法は、名の如く、極く簡單でありまして、記入に左程手數がいらぬ。之を覽るには、簿記法の智識が、なくとも分ります。只、損益を見るとか、事業の成績な帳簿の上に集むるとかいふ便利がありませぬ。之れ故、小さな身代の家、まづ、中流の家までは、單式に據るがよろしくあります。又、別に、事業のなき官廳、小さな公署にては、單式にて差支がありませぬ。
單複の區別は、此の位にて、次の貸借の説明にうつります。

郭公なき〳〵飛ぞ忙はし　（芭蕉）



文林

林新樹　東久世通禧

のこりなく夏のけしきに成にけり
片やまはやしみつえさしつゝ

夜卯花　高崎正風

ぬは玉の暗のよめにもみゆるまて
庭しろたへにさけるうのはな

芍藥　鍋島直大

若葉のみしけれる庭にさきいてゝ
いろうるはしきさくやくの花

竹風　津輕承昭

おのつから涼しき風そこもりける
陰しけりゆくのきのわかたけ

山新樹　竹屋光昭

來てみれは遲さくらさへ散はてゝ
あをは涼しきやまのしたかけ

雨後新樹　水野忠敬

けさふりし雨の名殘にわかゝへて
みとりしけれるにはの面かな

岸上藤　宮地巖夫

川岸のまつのこすゑにおもしろく
かゝりてにほふふちなみの花

筍　北郷久政

一むらのはやしはあれし竹の子も
千世のねさしは替らさりけり

卯の花散らんとす　植松有經

いまよりの夕闇いかにくらからん
卯の花つきよかけきえんとす

田植うた　千葉胤明

賤の女かうたそ聞ゆるわか葉さす
もりのあなたに田植すらしも

谷新樹　　蜂須賀隨子

うくひすの古巣やいつこ谷の戸は
青葉かくれになりにけるかな

庭卯花　　近衞貞子

茂りあふ木立かくれにさきたれと
まかふかたなき庭の卯のはな

山家夏　　鍋島榮子

みつえさすやま下庵をとひくれは
藤もつゝしもいまさかりなり

若葉の露　　南郷柳子

白妙のころもてすゝしあさかせの
かしのわか葉のつゆもこほれて

市中梅雨　　柳原愛子

さみたれの雨にゆきゝの絶せぬは

みやこの市のちまたなりけり

夕卯花　　小池道子

くれ殘るうの花かきにむかひゐて
かゝけおくれぬ窓のともし火

朝更衣　　松平健子

夏ころもけさぬきかへて花にそむ
はるのこゝろもうすらきに鳧

遠時鳥　　小川直子

立まよふ雲のあなたのほとゝきす
かすかなる音をきくそ悲しき

望遠帆　　中島歌子

島かけにいつ成にけんみるほとに
うこくほとなき沖のしら帆の

雨中待郭公　　服部磯子

さみたれのあまこもりして足引の
山ほとゝきすまたぬ日そなき

夏景色

三浦千春

山家卯花

山さとはいまたぬの子もぬかなくに
うの花かきはしろかさねせり

藤

わか宿の松にあまりて夏にさへ
さきかゝりけり藤なみのはな

夏朝

風そよく柳のもとのあさすゝみ
あつはゆふへと何おもひけん

雪間郭公

むら雨のくもまの星のわつかにも
なく音めつらし山ほとゝきす

宮地山に登りて時鳥をきく長歌

竹尾正久

内日さす宮路の山は、もみち葉山錦の山と、名にたてる山にしあれば、其の山を打越すなべに、其の木々の青木もみむと、朝鳥の朝立出て、思度ち手たづさはりて、分のぼる道をさがしみ、岩かねに足ふみなづみ、しまらくと休らふほどに、足引の山ほとゝぎす、並立る松の木末を、花ちりし藤のうら葉の、うら若き初音もらして、さやかにも鳴てぞ渡る、其の聲をきけばめづらし、其の聲をきけばゆかしも、そこ故に我はおもはく、もみち葉の秋はあれども、水枝さすわかかへるでの、立かへり又も來てみむ、宮路の山は。

反歌

ほとゝぎす人もまつらむ初聲を

今日の山路のつとにしてまし

藤の雫

小西甚之助

五月十日繊雨の霽間に、去年の今日催し〻、東宮御成婚奉賀地の蹤訪はゞやと、龜鶴山の逕を逍遙しけるに、枝さしかはす天皇山の新樹、身も心も洗ひ滌る〻みづ〴〵しさ、滿ち〳〵たる宮池の面は、穩波を湛えて浴晃の痕ゑくぼを作るぞ嫣然けき。殊に藤が浦の岸の藤浪、今日一入色增りて、其の下蔭の叢竹に、何時か生ひけん竹の子の千代の始の姿見えたる、其の愛くしさを何に譬へん。鷺の松の下枝、垂れて其の頂を撫るか如く、椿が岡の玉椿、匂ひて八千代を壽ぐに似たり。顧ふに一年前の今日の日に、賀杯を舉げしは此の藤の下蔭ありき。今日、此の下蔭に、若紫の色を仰ぎて、親王御降誕の嘉祥を祝ひ參らすこと、何の懽忻かしかめやは。折しも奏づる松の調に、匂ひぞ馥る藤の雫、下蔭の竹生に、ゆかりの色の潤ふるこそ、云ひ知らず淸げかりけれ。

藤の花ゆかりも深き下露に
　千代の竹の子生ひ出でにけん

漫錄

女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一、膳を參らする樣、吸ものゝ木具を持つ通にし

て、客の前に參り、二ひざすゝみて、膳を客の左りへ假置し、さて、吸物の木具を客の右へうつし、膳をとりて、正面に居ゑ、少し押し進めて、吸物の木具を取り、二ひざ下がり開きて起つべし。膳には、食汁、鱠、つぼ、皿、香の物を載す。平皿と猪口は、中足の木具か、略しては、丸盆に居ゑて出すべし。膳の右に置くべし。樣體前に同じ。燒物は、八寸の木具にのせ、膳の向に置く。樣體前に同じ、但し、燒物は向に置が本義あれども、客、燒ものをとるに、膳越しの忌ををかす事もやわらん。よつて、客の右へ置をよしとす。進退前に同じ。頭を客の左にし、腹のかた客に向ふ樣にすべし。飯次を木具又は鉢の臺にのせ、飯匕は飯次の手前に置べし。さて、次の間に中座すべし。鉢脇二人通ひ盆を持ち、鉢の役に從ひて出で、飯次の左右に坐す。左方の盆には、分け杯を載て出すべし。(分杯は、汁碗のふたを二つのせて出すべし。)食の初盛小飯のごとく、いさゝかもりてある時には、飯次、中坐より直に再進に參るべし。まづ、兩手にて鉢のふたをとるに、手前高く向ふをひきくし露を切りて、右脇の盆へ置べし。左の通ひは飯次に從ひ、客の前に進み、食次の左に居るべし。飯次の役臺を少し左へよせ、通ひ盆をとり、二膝ばかり進み、客の右より盆にのせたる分杯を參らすべし。(是は、通ひの役進み、兩手にて分杯をとり、引落の中足へ置方が、都合よろし。)さて、鉢の役通ひ盆をとりてさし出し、椀をうけて、膝をくり下げて、食次にむかひ椀を盆のまゝ下へ置き、兩手にて椀をとり、左りの手に糸底の處をつまむやうにして、しかと持ち、飯匕を取り、飯を盛る事二匕半ばかり、匕を飯次の中へふせて置き、匕の柄のはしを緣へかけて置くべし。さて、兩手に

て椀を盆にのせ、進みよりて參らすべし。此の時、燒もの向ふにあらば、客の左りの方よりさし出すべし。もし、燒もの左にあるときは、客の右の方膳と引落しの中足の間よりさし出すべし、都て、膳部の眞上へ越して、通ひ盆などさし出すを嫌ふなり。飯は、手にて參らするものなれども、婦女の業には盆にて參らするかたが、しほらしく見ゆるゆゑなり。さて、中坐にかへり、ふたをして勝手へ入る。左右の脇も從ひ入り、飯次脇ともに出で中坐す、左脇は、汁の再進を客の前に持參し、二ひざ進みて、盆のまゝ下へ置き、客の汁椀を出さるゝをまつ。客、汁器をわたされたらば、兩手にて受取り、盆へ置き、再進の汁を兩手にて膳の上へ置き、空椀を盆の眞中へ直しふたをして、二ひざ下がり開きて起つ。(此の時明きわんのふた、自然、左右のかげにて取にくき處にあらば、其のままにして、ふたをせずにさがりて苦しからず。左右をさしのぞき、さかすやうあるはあし。)飯次の役、又參り進むる事前の如し。左脇は、汁椀の明きを勝手に置き再び出で、飯次に從ひ進む。飯汁の通ひ、何ケ度にても、此の定なり。飯三進し中坐せば、左脇はすぐに勝手へ入り、汁の三進を持參。客の前に進み、再進の時のごとくすべし。客、十分參りし由にて辭し申されたらば、三進の汁を盆にのせたるまゝ持て、二膝下がり開き起て勝手へ入り、汁を置く。又た出て、飯次に從ふべし。飯次の役、又進みて飯を進む。此の間に、主人または長立たる役人出で挨拶あるべし。飯次役、中坐にて鉢にふたをして、飯次をそのまゝ置き、左脇の通ひ盆をとりて客の前に進み、二ひざ進みて盆を置き、手をついて、御口に適ひし品も候はゞ御代へ被遊よと申す。客、もし、代りを出された

らば、持て退き、脇の通ひに渡し、飯次を持ち勝手へ入り、鉢を改めて中坐へ出づべし。此の時、參客十分あるよしにて代りを出されぬものあれど、時宜によつて、代りを出さるゝことあるべし。必ず本膳の品にて、多くは壺皿をうけて持ち下がり候を、左り受取り勝手へ入り、再進の壺皿を持參し、汁を進むる時のごとくし、壺皿を兩手にとりて、膳上に置き、盆を持、二ひざ下がりて開き起つべし。飯次の役、又參りて勸むる事始の如し。客十分のよし被申、湯を乞たらば、退き勝手へ入り、左右とも從ひ入る湯水次參りて中坐す。(湯はふたつきたる提子、または、湯桶に入れ、臺にのせる。水もまたおなじ。)さて、客の前へ進む。水は中坐にあり。湯の臺を少し左りへよせて置き、湯桶をとり、二ひざすゝみよる。客、椀を出されたらば、程よくつぎて參らせ、二ひざくり下げて臺へ置き、持ちて開き起ち中坐す。客、はしを被納たるを、見て、勝手へ入るべし。水も入る。(客、めしを少しのこし、湯漬にして參らるゝ事あり。さるときは、また、湯つぎ參らすべし。其の心遣ひに中坐して、客の、全く、はしを納めらるゝを伺ふあり。

あそび草(五)

作者不詳

みちは、ひとのみゝめを、おどろかしむるは、まことのみちにあらず。あるゝかゆゑに、おどろかさらんは、まことにおどろかすといふにはあらず。おどろかしきにあらずとはいへど、あまりにしけきもまた、まことのみちにはあらず。なるゝかゆゑにしけしとせざるは、まことに、しけからさるにはあらず。ものにつかふるはかりことは、おな

じくいふにたらざるなり。おどろかさず、しけからず、もの〻ためにはたらかず、たゞよのつねのよきにして、わたくしなきを、まことゝす。また、そのこゝろおほやけならねば、よのつねをあきらむることなきあり。よくよの、つねをしらむとならば、きよきこゝろをもとめぬべし。きよきこゝろをもとめうるとき、おのづからこれをえてむ。

おもひぬべきにあらざらむをば、ひさしく、おもふことなかれ。くりかへしかへしても、また、おもふことなかれ。きよからぬわざなり。おもふをけかれとするにはあらず。おもはざるをきよしとせず。

おもふべし。おもふべからず。たゞ、きよきこゝろえしたがふのみ。まなびもとむること、あに、ふたつあらむや。こゝろきよからば、みな、おのづからゐてむ。

およそ、きよからむがために、けかるゝことあり。これをけがれされば、きよらをうしなふ。これをうしなふべけむや。

もとめざるにきたれるおもひは、おもひぬべきことおほかり。みづから、うこきさへきり、おもふも、「また、おほやけのこゝろなきのみにはあらず。」こゝろきよければ、かすかすゝ、おのづからあきらかなり。さらに、えてんとすることなかれ。こゝろきよきものは、おのづから、おもふことあり。また、おのづからおもはざることあり。おもはざれども、むなしからず。おもへども、また、しげからず。そのこゝろきよければ。こゝろまことにすことよかなり。なすとして、あに、とはらざることあらむや。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資て我が短を補ふべし。他の短を以て、反省の料となすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせるこの愚をなすべからず。

第三章　佛蘭西婦人

（其の四）　佛蘭西婦人の摸範

（三）　那翁の勁敵ステール夫人

夫人は、佛王路易十六世の宰相たりし理財家、ネッケルの娘なり。夙に、學を好み、爲に健康を害せし程にて、政治、文學に其の力を注げり。十七八歳の時、ジヤン、ジヤツク、ルーソーを著し、初めて、其の名を佛國文壇に知らるゝを得たり。次いで、自殺論を公にせしが、才筆華の如く、論鋒頗る犀利なり。而も、深窓の一處女、未だ、世故に通ぜざるの爲め、往々、事實に於て、批難を招くの點を存したりき。十九歳にして、巴理駐劄の瑞典公使ステール男爵に嫁し、爾來、交際塲裡に、時の名士と相馳騁するを得、大に政治界の消息に通じぬ。夫人は、元來ルーソー崇拜家にて、君主主義には、絶對的に反對の人なりしかば、路易王の末葉には、大に革命黨に同情を表せしも、其が暴戻飽くなきが爲に、遂に、之を厭視するに至れり。

次で、拿破翁出でゝ帝政を布くに及び、太く之に反抗し、絶えず、其の俊爍の筆を以て排擊せしが、更に、「政治及財政に對する最後の意見」てふ一書を發刊し、政權を一手に掌握するの非を論じて、佛國頑迷者の夢を醒し、拿翁の眞正面に一大鐵槌を加へたり。拿翁、曾て、夫人を率いて我味方に加へしめんとし、百方之を誘ひしも、夫人は、頑

として應せず、而して今は此の著わるを視、大に怒り、直に、其の發賣を禁じ夫人に巴理を去る四十哩外に退去を命じたり。

是より先き、夫人の家は、ナポレオン反對黨の會所に充てられ、夫人は、常に其の會に列せり。黨の牛耳を執りしは、夫人の親友ベンジャミン、コンスタントなりき。既にして、夫人は、佛獨伊等に旅行し、時の文豪ゲーテー、ミルレル、スレーゲル等に交を結び、頗る、其の才識を稱せらる。其より一二の小作をなし、次いで、ドラレマニユと題する獨逸に對する觀察を収めたる一書を刊行す。這は、夫人が唯一の傑作にして伯林巴理の紙價をして貴からしむ。

斯くて、夫人は、拿翁攻擊の鋒芒益々熾なりしが、此の回は、國外に退去を命ぜらる。而も、夫人の意氣毫も衰へず。幾多の著作みな、拿翁を捉へて之に鞭てり。最後に、拿翁にエルバの流竄地より遁れ來り、復威を振ふに及び、辭を卑うし、夫人に來ッて、其の憲法制定に一臂を借さんことを請ふ。夫人笑ッて之を斥け、死に至るまで其の主義を變せず。其の筆を曲げず。天晴、當時、佛國女界に、政治文學の巨擘として其の名を留めぬ。

夫人は、亦、個人としても氣品高潔、能く其の父母に事へ、良人を敬し、兒女を慈み、世の模範たるの人なりけり。

（四）畫家ブルトン夫人

父祖共に有名なる佛國の畫家にして、夫人、亦、幼より畫に巧に、十九歳の時美術展覽會に出品して、大に、斯道諸家の稱賛を得たり。

既にして畫家に嫁し、一子を擧げしが、元來夫人は、兒童を愛すること甚だしく、其の畫、亦、殆んど悉く母子の愛を寫せるものにて、其の技、

神に逼るの概あり。夫人の居室は、總て、是等の兒童畫を以て飾られ、愛兒、其の間に嬉戲し、慈母、其の間に黽勉す。而も、恍然之を見れば、畫中の人か、人中の畫か、之を別つを苦しましむ。夫人は、時として、漁村に遊び、天成の妙趣を收めて、數幅の畫中に入る。此に於て、一木一花再び生き、山川人畜更に光を發す。而も、夫人の隱棲するや、啻に、畫に於けるが爲にあらず。亦、能く、漁村の爲に盡くす。故に、到る處に、人の敬慕を受く。

斯くて、婦人の名聲高まると共に、推されて夫人繪畫彫刻會々頭となる。夫人は、實に、ロザ夫人に次げる佛國第一流の畫家なり、而して、一家、共に其の天分に隨ひ、能く奮ひ、能く伸びしに由れるなり。

作文雜話（一）

安藤晴晟

文章とは如何なるものぞ

文章といふものは、畢竟、連續したる吾人の思想を、文字にいひあらはしたるのである。

吾人が、各自の思想を他人に傳へるに際して、其の方法として用ゐるのは種々ある。或は、目つきによつても出來るし、或は身ぶりでも用がすむ、また、彼の上古に用ゐられた、また、今日でも野蠻社會には用ゐられる所の、彼の結繩といふこと、即、繩などの結び方で意味をあらはす事も、その方法の一つである。然しながら、是等は、今日の人文發達したる社會の人々の思想をあらはすには、いづれも、不完全きはまるのである。されば、今日の社會で、先、吾人の思想を完全に、（も

とより、比較的完全に)。いひあらはし得る方法としては、言語によるのと、文字によるのとの二つに過ぎないといふても、差支がない。

そこで、此の二つの方法、即ち、言語によりて思想をあらはすのと、文字によりて思想をいひあらはすのと、いづれがまさるかとの問題が起つてくる。

此の二つを精密に比較して、優劣を判ずるといふことは、甚、むづかしい事であるが、こゝには、きはめて粗い言葉でいひあらはして見やうならば、先、こゝに二人の人があつて、その人の才智も技能も、すべてが等しき程度であるが、たゞ、その長處とする所が異つて、一方は甚辯舌に巧であり、一方は甚文章に巧みであると假定した所で、これらの人の、いづれが最廣くその思想を人に傳へることが出來るであらうか。もとより、言語(發達した所の文明社會の言語)は、きはめて緻密なる思想をいひあらはす事が出來得るのみならず、また、よく語勢の上に、文字のあらはしうべからざる力を表はし得るものであるから此の點では、文章は言語に一歩を讓らなければなるまいか、惜しいかな、言語の勢力の及ぶ範圍は、たゞ、その言語を聽き得る圏内にある人々に限られてゐる。たとひ、言語の勢力は、文字を解し得ぬ人々にまでも、之を及ぼす事ができるといふ利益はもつてゐるが、之を、彼の文章の、時間空間の兩者にわたつて、世界のいづくのはてまでも、幾千年の後の世までも、その感化、その勢力を及ぼすのとくらべてみたらば、その差異の甚しきは、いふまでもない、種々の學者の不朽の傑作大著は、さておいて、彼の英國議院で幾百の士女をして恍惚たらしめた、エドマンド・バークの大演説も、また、彼

の米國の人心を鼓舞して、遂に、十三洲獨立の基をなしたパトリックヘンリーの大雄辯も、今日、吾人がその思想をうかゞひ得るのは、たゞ、文字文章の力によつてゞある。

文章が、斯の如き勢力を有するにも拘はらず、世間の人が、あまり注意をそゝがないのは、むしろ、怪しむべきである。我が國の學者ともいはるゝ人人の如きも、文章は、文學者の閑事業として顧みないが、これは、甚、間違つて居る。今日の哲學者歷史家または理學者としても囃さるゝ人々の著書をみるに、その多くは、或は、乾燥無味の文であつて、之を讀むでゐると、恰も、炎熱燬くが如き時サハラの大砂漠でも旅してゐるやうで、それを專門として居るものでゝもなければ、一向、興味を有することの出來ないやうなのがあり、或は、佶屈聱牙、殆、意義の解し難いやうな文句のみで、之を讀むで居ると、何だか砂でも嚙むで居るやうな心持のせられるのがある。わが思ふ所をいへば、かゝるやうなものは、果して、その學に忠實なものといはれ得やうか。近い例が、外國の科學者をみるがよい。その大家ともいはるゝ人々は、なか〳〵、その文章などに注意せらるゝといふ事である、彼の不朽の大著として、今日に傳はるものゝ多くは、その文章も、また、文學者の傑作に劣らぬくらゐなのが多いといふではないか。言が少し、わきにそれたが、兎に角、文章を勉めて學ぶといふ事は、人にとりて、きはめて必要の事である。尤、こゝにたゞ文章といふと、讀者は誤解するか知れぬが、我が文章といふのは、始めにもいつた通り、何でも連續した思想を文字にあらはしたものを、文章といふのである。單に、記事文あり、論說文ありをさしていふのではない。

書簡文であらうが、講談の筆記であらうが、すべてを包括した、極廣い意味でいふのである。それであるから、苟も、自分の思想を人に傳へる必要のある人、いひかふれば、手紙をかく必要のある人ならば、その人は、既に、文章を學ぶべき必要ある人というて差支あるまい。讀者の中には、或は、論説文、記事文など、學ぶ必要がないといふ人もあるか知れないが、夫君が遠く家をはなれて居らるゝ時など、家政上の事などに就いて、自分の意見を書中に詳述して、夫君のそれに對しての意見を聞くべき必要の起る事はあるまいか。また、舅姑の人々など、離れて、夫君と任地にある時など、その地方の狀況、または、子女の起居などを記して、書をおくるべき必要の起る事はあるまいか。若、かゝる必要がありとすれば、女子たるものも、これらの筆になるゝことをつとめなければなるまい。

單に、右の如き理由よりのみならず、すべて、吾人は、その文に對して、その人を想ひ見ることが多い。文情の優にやさしく、筆つきのいみじきを見ては、何となく、多人のゆかしく思はれるは、誰も、さうであらう。されば、文章をみがき、文情をやしなふといふ事は、自己の品格を高めるといふ點に於ても、尠からぬ資となるものであるともいふ事が出來やう。

大和めぐり （第二百十八號の續き）

井上頼文

四日　午前の記者は、近藤氏なり

朝起き出で、例の事しをへて、門出せしは、午前七時なりき。此の宿は、家造りまだとゝのはず。

浴室、厠等は殊に不潔をきはめなり。此のやに、御陵の圖をひさげり。先、之を購ひつ。橿原神宮、及び御陵は、昨日參拜すべき豫定なりしを、日の暮れたれば、えせざりき。今朝參拜せんとする折しも、雨はふりきぬ。宿より案内を爲しくれたれば、導かれて、橿原神宮に詣づ。此處では、昨夜こし道を戻りたるなり。先神前に至りて、禮拜す。境内には、池あり。園などは、まだ造りとゝのへられず。社務所に至り、御守札を請ひ、序に御本殿、及び拜殿等の廣さを尋ねたるに、神官委しく記せる物持ち出で來て敎へつ。生等は、之を書き取りたり。本殿は、西京の御所なる、内侍所、拜殿は、同じ神嘉殿とて、寛政年中、樂翁公の造り奉れるを、明治廿二年、此の處に遷し奉れるなりとかや。畏けれど、神嘉殿の如き、宮中の御殿としては粗略なるものなり。歸りて、御陵に詣づ。御陵は、木柵、石柵、土堤、及、池をもて環らせり。生等は、第一の御門を入り、次の御門にて、禮拜す。

謹みて、古史を案ずるに、天つ日嗣の御さかえ、天地のむたとこしへなるべしとの御詔を受け給ひて、天降りましゝは、彦火瓊々杵尊にましませり。其の後、二御代の程は、西偏にましゝければ、すめらみことの御いづ、大八州の國内に普からず、處々に酋長ありて、互に爭へりき。神倭の天皇、之を統一せむとおもほして、大和に都を遷し給へり。かくて射向ふものは討ち、從ふものはめぐみ給ひて、平定の功を終へ給ひ、即位の大典を擧げて、天が下に天位の尊きを示し、皇祖天神を齋ひ奉りて、報本反始の誠をつくし給へりき。大なるかな、帝の御德。至れるかな帝の御業。天祖の詔を恢弘して、皇國の基を定め給ひしは、

實に、此の天皇に座しませり。今日しも、こゝに詣でゝ、其の御德業を仰ぎ奉るは、まことに畏しとも、畏き極にこそ(評、昨夜、天長の佳節を祝し、今朝、御陵の尊嚴を仰ぐ、無限の感慨胸に溢る)

御陵を出づれば、前におごそかなる建物あり。勅使の休憩し給ふ所なりとか。再、宿に立ち寄る。主人、奈良まで送らむといふ。己が組せる宿に連れ行かんとなるべし。されど龍田に廻らむといふ人多ければ、其を止めて道をのみ尋ねつ。この處に、大祖敎會といふあり。町をはなれて、しばし北に行き、綏靖天皇の御陵を拜し、今井町に至り、左に折れて、次の村、蘇我に至る。このあたりに、入鹿の墓所ありとか。右に折れて、小槻太綱等の村を經、百濟、廣瀨等の村を過ぎて、萱野村に至り、櫛玉比賣神社の前なる茶屋にて休ふ。時に、三橋先生は胃弱にてなやみ給ひたれば、井上泉館の兩先生も、共に、其處に殘り、生等、先立つ。この村をへて、川の堤に上りたるに、赤き鳥居向ひに見ゆ、辨財天村なる、市杵島姫神社なるべし。しばしゆくに、右に渡る橋あり。傍に家ありければ、河合にはと問ひたるに、この堤をゆけといふ。橋を渡らで行きたるに、遙、西の方を北に進む者、二三人あり(評、このあたり、困難、特に甚しかりき。其のさまかゝざるは、筆も及ばざればなるべし)彼等は橋を渡りしなるべし。折しもかなたより來る人に、いつれか近きと問ひたるに、彼方は近道なりといふ。口惜しけれどせん方なし。堤を下れば、川合村なり。この村はづれに、川あり。橋を渡りて、廣瀨神社にまうづ。社は朱を以て塗れり。社務所にて、御守を受け、料はと問へば、御志次第なりといふ。いづれもかくありたきことなり。暫時休息したるに、雨は、いよ／＼ふりまさり、足も、いと疲れ

にければ、龍田にゆく事を止め、直に法隆寺に向ふこと丶し、この社の後なる、笠目村に至り、物食ひて、空腹を補へり。法隆寺までは、此處より二十町なりとかや。西安堵村をへてゆく程に、三人の先生は、車にてゆきすぎたまへり。午後一時十五分、法隆寺村、かせやといふに着す。前の、三先生は、待ち居られたり。今日は、わりご持たざりければ、こゝにて晝飯を食べつ。

一夕話（承前）

大宮兵馬

此の年の冬、大高又次郎、訪ひ來て言へるやう、御身は女子にてこそおはせ。梅田先生の御姪なれば、我等、心の底ひを打ち出で丶、かくと頼み參らするなり。其は、先年、櫻田に於きて、井伊掃除頭打たれしより、世の人心も改りて、先生の御志も、やう〳〵達すべき時とはなりぬ。長州なる正義の人々も、遠からず上り來ぬべしとぞ。今より、御身は、大原重德卿に詣で、しか〳〵の事の由をも聞え參らせてよと言ひけり。これ、いと女の身には、おふけなきこと丶は思ひしかど、やがて、心振り起し、彼の卿のみ前に詣でつるに、卿は、已れを奧書院に召されて、親しく御目見え賜はせたり。さて、頼まれしことどもを、殘る限なく聞え上げつ。此の日は、雪いたく降りて、御庭の松の、大方埋もれてありしに、

消え果てん明日しら雪の命とは
知りつゝ積る我が思ひかな

と詠みて奉りたりしに、卿、ことの外に御氣色よくて、さてこそ汝は梅田が姪なれと仰せられたり。其れにつけても、叔父君のまし丶世のみ思ひ出で

られて、涙おさへこぼすばかり悲しかりき。已れ、二十一の歳(文久二年)、春の頃、入江九一、久坂義助、佐世一誠、秋元正一郎、大高又次郎、同忠兵衛等も、やう〳〵京に集まりて、叔父君の御志の、やがて達しぬべき喜びにとて、已れをば、七條わたりの某の亭に伴ひて、いとも厚く饗應しけり。かゝるむしろにものするにつけても、叔父君の事のみ、そゞろに忍れて、

在りし世の事こそ思へ懐かしあ
花橘の咲くにつけても
忍ぶかな枯れにし庭の梅の花
咲き返りぬる春の空にも

と書きつけしかば入江九一も矢立より筆抜き取りて秋元(秋元は、御國學をたしみて、典故に通じたり。)に打ち向ひ、幕のことは、御國言葉にては如何に言ふべきぞと問へば、それは、あげばりと謂へりと答ふ。さて、入江は、

時の來て都の春の櫻狩り
亡き人こひしあけぞりの内

と詠みて、已れが前にさし置きぬ。此の時に、長州の人たちに向ひて、吉田松陰ぬしは、我が叔父君の知人なりせば、何にても、其の書かれたるものあらぞ、已れに取らせ給はずやと言ひ出でたるに、佐世一誠、やがて、心得ぬとて、後に、大高に傳へて松陰の江戸に送らるゝ折り、長州の獄中にて書きたる詩歌一枚をば、贈りおこせたり。(此の頃、佐世等は、ひそかに企てたるとのありければ、自ら、身命の測りがたきを思ひ、已れ梅田の姪なればとて、其の秘藏せし松陰の遺墨を送りけりとぞ。これは、今も、已れが手に持ち傳へたり。佐世は、前原一誠の初の姓なりき。

さても、此の後は、已れ、彼の人たちに頼まれて、

度々、大原卿へ參り、其の書面の取次し、又、種種の事どもを聞え上げたり。

其の頃、常のわざとして、人の着物ども縫ひなどして得たる手間代もて、下岡へ食料を納れつゝ、月日を過ぐす間に、また、暇ある時々は、巽太郎に手を習ひ、梁川紅蘭に漢文を學び、蓮月尼に和歌を教へられたり。されど、已れ貧しければ、筆墨をすら買はむ料にもさしつかへなどするほどなりしを、彼の人たちも、いとあはれみて、禮物などは取られざりき。

（未完）

謎うたの解

はがねにも鐵にもあらぬ麻糸を
　四國刀とあどかいふらん

解に曰く、刀とし云へば、鉄、鋼鐵もて、うちたてるものなるに、植物質の麻糸を、四國刀とは、何故かと云ふに、そは、さばかりむづかしき事にも非す。云ふまでもなく、四國とは、阿波、讃岐、伊豫、土佐なり。よりて、この上の一字づゝ取ならば、あさいさ（麻糸）の四文字を得、されば、こそ、四國片名（刀）とは云ふめれ。あなかしこ。

（超舟漁史）



皇孫殿下の御降誕を祝ひ奉りて

この君の親にならひてすくよかに
　千代のふしをやかさねますらむ
下田春興

今とし生ひの園の若竹すく〳〵と
　すゑの代長きふしそ見えける
下田しげ子

（日本女學校生徒）

こゝのへのそのふの竹のさし〳〵に
　しけり行く代そたのしかりける
谷崎まつも子

あけ渡るみそらにたかきひなつるの
こゑないはゝぬたみくさそなき　中川さし子

榮にゆく八千代もみねておひそはる
たけのそのふのうちそゆかしき　久保和歌子

家ここにひのおほみはたかゝけつゝ
きみの八千代をいはふけふかな　奥田あい子

たかひかる日の大御子のあれいてゝ
くにのひかりそまたそはりぬる　白根なか子

君か代のさかねましますさきにこそ
かくよろこひはかさなりぬらん　沼澤こう子

やちとせの後のひつきとすめみまの
あれいてましゝけふのめてたさ　鵜峰やす子

千代八千代祝ひてまつのさきはなる
おほうちやまにたつうたふらむ　小玉きくを子

すめらきのいともかしこき君か代を
あをひとくさもいはふ今日かな　藤田つる子

君か代をなにゝたとへんすみよしの
まつもちとせにかきれるものを　牧原しの子

すめみまのうまれ給ひし今日の日を
われらをさめこいはゝさらめや　土生津さく子

皇らきのみまのみことのことほきに
千代をかされていはひまつらむ　水本雪枝子

君か代のさかねことほきもろひとの
千代のつるかめいはふ今日かな　小野川てつ子

松か枝のみとりもふかきそのなかに
はつこゑたかし千代のひなつる　高橋愛子

（以下次號）

六月五日兼題

月前橘

天

月やとるはなたちはなのつゆ散りて
のきのをすふくかせかをるなり　三河國富岡郵便區鈴木榮方　源たけ子

評に曰、調はなやかに、いひまはしたるはたらきありて、いさゝ〳〵、めでたし。

地

里とほみかをりとめこしたちはなの
かけふむみちのつきふけにけり　東京四谷區大番町七十七番地　中島さく子

評に曰、調つゞきなだらかに、よくことのひて、いさゝ、めでたし。

人

おほ空につきおしてりてふきわたる
かせゆかしくもにほふたちはな　東京本郷龍岡町日本女學校　川井田章子

評に曰、力ありて調たかし。

秀逸　　甲斐　名取正代子

むかしうつす月のかゝみにてらされて
いやなつかしくかをるたちはな

○　　三河　岡山良子

さえ渡るつきのかつらにかをりあひて
むかしこひしきやとのたちはな

○　　肥後　徳永廣子

たちはなの花さくやとはのきはもる
つきのにほひもゆかしかりけり

○　　肥後　佐々有鄰子

ほとゝきすこゑもかをりてたち花の
かけふむみちにつきそてりたる

○　　東京　林環子

月もさえかせもすゝしきこのゆふへ
はなたちはなの香さへこほるゝ

○　　肥後　服部倫子

月かけのさしいるまとのをすまけは
はなたちはなも香ににほふなり

○　　東京　増田そで子

すゝしさを袖に待ちつるつきのよに
はなたちはなの香ににほふなり

○　　東京　高地こう子

ありあけの月かけきよみおりたては
にはのたちはな香ににほふなり

○　　東京　杉山君代子

ふくかせに花たちはなのかをりきて
ひとまつ夜半のつきそふけゆく

○　　東京　天野みち子

たちはなの香りさそひてふくかせに
くもまをいつるつきもにほへり

○　　信濃　高須奈董子

すむ月にのきのたちはなかをる夜は

まきのいた戸もさゝれざりけり
信濃 高砂き代子

○

五月雨のあとりのつゆもかをりつゝ
つきにいろあるにはのたちはあ

(以下原稿到着順)

こすゑより月のにほひもこほれきぬ
たちはなかをるなつの夜かせに　伊勢村春子

むら雨のなこりのつゆもかをるまて
はなたちはなてらすつきかけ　小田みち子

五月雨のくも間なもるゝつきかけに
むかしゆかしくかをるたちはな　横井幸子

のきちかく咲き香ひたるたちはなた
さやかにてらすつきのしつけさ　中村瑞子

たちはなのかをるゆふへはてる月の
かけさへいさゝなつかしきかな　永井さい子

月てれるよるのすさみにたちはなの
はなのかすなもよみてけるかな　佐野享子

たちはなのにほふ木の間にほのめきて
ひかりもすゝしなつの夜のつき　徳永萬壽子

庭の面につきのひかりもにほひあひて
むかしなからにかをるたちはな　徳永識子

さみたれのはれまにかをる立はなに
にほひかはせるゆふつきのかけ　鶴田貞子

ゆふ月のひかりもそひてたちはなの　近澤和子

はなのしらつゆたまさこそ見れ

さみたれはあさなくはれて夕つきの
かけもひさつにかをるたちはな　佐々小琴子

たちはなのつゆにやされる月見れは
すきしむかしそしのはれにける　村瀬花子

さらぬたにむかしなしのふ月のよに
のきのたちはな香なりきにけり　金原玉城子

おり立ては月のかけさへてりそひぬ
はなたちはなの匂ふそのふに　岡田りう子

月あかきいけのほとりなさまよへは
そこさしもなくかをるたちはな　大谷津光子

ふるさとなしのふのきはの月かけに
香もなつかしくにほふたちはな　吹田たけ子

たちはなのかをれる庭のこのまより
にほふもゆかしゆふつきのかけ　鏡山博代子

夏のよのつきのかつらもかをるなり
にはのたちはなさきのさかりは　武田龜子

つき見つゝはしゐしをれはたち花の
にほひすゝしくかせかよふなり　高石登代子

月のさすのきのたちはなつゆ見ねて
むかしゆかしき香こそこほるれ　福原菫子

わかやさの軒端ににほふたちはなの
はなもあらはにてらすつきかけ　積山きやう子

たちはなのはなさきぬらし夏のよの
つきのひかりもかにゝほひつゝ　野口信子

夏のよのつきのひかりにかをるなり
たかそてふれしのきのたちはな　野口靜子

窓にさすつきのかつらのつゆふかみ
はなたちはなのにほひこそすれ　濱口貞子

わかやさの花たちはなにてるつきは
かけさへにほふこゝちこそすれ　戸賀崎治子

すき来つるむかしを忍ふたちはなの
にほひにかすむゆふつきのかけ　竹越こう子

袖ふれしはなたちはなのおひかせに
かけさたまらぬゆふつく夜かな　福井茂子

月かけにむかしゝのふののきもれて
はなたちはなの香ににほひつゝ　青本たま子

むらさめのなこりのつゆに月見ゐて
すゝしくにほふのきのたちはな　椎野秀子

ふくかせのなつかしきかなゆふ月夜
おもはぬかたににほふたちはな　椎野ぬき子

うたゝねのゆめはさめけり窓ちかく
さすつきかけににほふたちはな　樋口孝子

月の夜はこゝろもきよくふくかせに
はなたちはなのかをりうれしも　松尾やそ子

さやかにも月のかつらのしたかせに
にはのたちはな香ににほふなり　松尾くに子

月きよみにはもせにさくたちはなの
かけなつかしくかをるすゝしさ　石川もさ子

さみたれのはれてさやけき月かけに
つゆおもしろくかをるたちはな　熊澤しづ子

月きよみまさおしあけてなかむれは
はなたちはなも香ににほふなり　山根久子

たちはなの木の下かけにたちよれは
つきにゆかしきはなの香そする　林みほの子

夕くれの月のひかりにたちはなの
はなゝつかしくにほふころかな　河村すゑ子

ふく風につきのひかりもすめる夜は
はなたちはなのかこそきよけれ　本間ちゑ子

すむ月にかけほのみゐてたちはなの
はななつかしくにほふ夜半かな　永井あさ子

てる月もうつりにけりなかせのつて
はなたちはなのにほふのき端に　岡田まち子

てる月のかけおもしろしおりたては
ゆかしくにほふのきのたちはな　柏木はるゑ子

むらきものこゝろもきよきつきの夜に
ゆかしくにほふにはのたちはな　秋岡れつ子

たちはなのにほふこすゑにゆふ月の
ひかりほのかにさしそめにけり　村上さもよ子

さしのぼるさやけき月にわかにはの
はなたちはなの香そまさりける　打縄八千代子

たちはなのかをりもたかきなつの夜に
つきさへきよくすみわたりけり　金田さみ子

ひさしほの匂ひそまさる我かにはの
はなたちはなにつきもやとりて　柴田のぶ子

夏の夜のそゝろありきのころもてに
ゆかしくにほふたちはなのはな　會田まつ子

さしのほる月のひかりにさきにほふ
はなたちはなの香そまさりける　太田のぶ子

わかにはにひさ本たてるたちはなの　小川つる子

つきの夜ころに咲きそめにけり

ふるさとを思ふ夜ころのゆめさめて　加藤まさ子
のきはのつきににほふたちはな

吹く風も香ににほふなりたちはなの　谷崎まつも子
はなさくやさをつきにさはゝや

月かけのくまなくてらすわかにはに　藤波たま子
はなたちはなもいまさかりなり

五月雨のはれまのつきにたちはなの　田川みさを子
いさなつかしくにほひこそすれ

あめはれてものしすかなる夏の夜や　吉川仲子
はなたちはなにつきもやさりて

たちはなの清きその香もてるつきの　篠塚たけ子
くまなきかけにますこゝちして

てる月もこすゑにかすむこゝちして　森脇さゑ子
かこそたかけれにはのたちはな

月きよみおりたつそてにかをりきて　赤澤よれ子
はなたちはなもいまさかりなる

月きよきなつの夜ころをたちはなの　關口ませ子
はななつかしくにほひこそすれ

なつの夜の匂ひゆかしきたちはなに　豐田され子
つきのひかりもてりそはりつゝ

たちはなのかをりゆかしき夕まくれ　佐藤わき子
つきもこすゑにいさよひにけり

我かやさの花たちはなはつきかけに　菊地かれ子
かほりゆかしくさきいてにけり

すみ渡るつきもこゝろやよせぬらむ　田口すみ子
はなたちはなのかをるこすゑに

澄みわたる月のひかりのくまなきに　野口嘉子
かをりゆかしくにほふたちはな

匂ひよきはなたちはなのつきの夜に　國府田はる子
ひさなつかしき香こそたかけれ

庭のおもに今をさかりさたちはなの　向山まき子
つきのひかりににほふ夜半かな

さめ来へき人もあらしをわかやさの　林きみ子
つきあかき夜ににほふたちはな

月の夜に香をなつかしみさめくれは　堀内ふさ子
はなたちはなそいまさかりなる

我やさににほひそめたるたちはなを　今井たい子
ほのかにてらすつきのかけかな

我か庭のはなたちはなをゆふまくれ　松山かずね子
ほのかにてらすつきのかけかな

夏の夜のひかりくまなきつきかけに　三宅いそ子
はなたちはなもにほひあひぬる

庭の面にかゝみのこさくてるつきの　清水てふ子
かけもゆかしくにほふたちはな

たちはなの花なつかしくかをる夜は　海老原ひさ子
つきもこすゑをてらしかほなる

たちはなの花のにほひのふかけれは　今井りう子
つきもいさよふなつの夜半かな

たちのほる月のひかりもきよき夜に　中村せつ子
かをりゆかしくさけるたちはな

ほのかなる月のひかりのゆかしきに　木村さめ子
にほひもふかきのきのたちはな

三日月のかけほのかなるこのゆふへ　小島しづ子

月かけにひかりくまなきわかそのに
はなたちはなもにほひぬるかな　宮武てる子

ゆふ月のかけかすかなるにはの面に
はなたちはなそにほひそめける　足立こう子

さやかなる月のひかりにさきそめて
いまをさかりさ匂ふたちはな　沼井あい子

木の間よりあらはれいつる月かけに
にほひゆかしきのきのたちはな　鴻巣さし子

さやかなる月おもしろみおりたては
いまをさかりさにほふたちはな　金非ぬき子

五月雨のくも間のつきにほの見ゐて
いつくともなくにほふたちはな　岩田よれ子

我やさのにはににほへるたちはなの
はなたちはなの香こそたかけれ　濱口ころく子

空すみてつきたちのほるゆふくれに
かをりゆかしきなつの夜のつき　松山あや子

照るつきのひかりさやけき夏の夜に
にほひゆかしきそのゝたちはな　常間みすの子

端居してかせまちかてらつき見れは
にほひゆかしき庭のたちはな　天野みち子

咲きにほふ花たちはなのゆかしさに
花たちはなそかをり来にける　新非やす子

つきふくる夜かせもいさゝ身にしみて
つきも木の間にしはしいさよふ　中川さし子

月かけのすゝしくてらすなつのよに
かをりゆかしき庭のたちはな　栗田口のぶ子

夕つきのくも間を出るをりしもあれ
にほひもれくるのきのたちはな　松崎くま子

なつのよの月こそてらせそのかみを
むかしゆかしくかをるたちはな　坂島いま子

月夜よし夜よしさいひてたちよらむ
しのふよすかのにはのたちはな　服部蔦子

ゆふ月のかけふむにはのたちはなに
かをりゆかしきなつのたちはな　服部正子

さらぬたにむかしをしのふ月のよに
わかころもてはかにそしみぬる　森田さも子

さみたれのあめのはれまの月かけに
はなたちはなのかをりぬるかな　河合縫子

ほさゝきすまつよの月にたちはなの
いろさへみゐてかをるたちはな　三宅中枝子

ふるさとのむかしなからのたち花に
いろさへ香さへさやけかりけり　鍋田龍子

さよふけて妻戸おしあけうち見れは
つきもかはらすかけやさしけり　長尾小always子

咲きいててかをりゆかしきたち花の
つきにかけそふにはのたちはな　田村多豆子

涼しくもくも間をもるゝゆふつきの
こすゑをてらすゆふつきのかけ　山村道子

雲間もるつきのひかりはたちはなの
ひかりもかなるにはのたちはな　田村米子

夕つきのかけさへすゝしにはの面に
はなのありかのしるへなりけり　本さめ子

たち花の香をなつかしみさめくれは
はなたちはなの咲ゑのさかりは　中島景子

むかしながらのつきは出にけり　高須奈清子

なつかしく軒のたちはなかをりきて
むかしこひしきなつの夜のつき

夕つきのかけもにほひてわかやさの
にはのたちはな咲き初めにけり　高砂菊代子

六月五日兼題

節儉の説

人　　下谷區御徒町三丁目卅三　岡田柳子

人、各自、家をたもつに、節儉を、守らざるべからざるは、今更に、いふをまたず。さるに、世の人の、此頃のさまよ。四季折々の、花を見んとては、あやしき迄、きらびやかに、よそほひなして、いで立つ姿、美くしとやいはんか。はた、羨ましとや見んか。己れは、中々に、いひいでん、言葉をも、知らずなん。抑、節儉は、みだりに、金錢を、浪費せずして、其の職業をはげみ、然して、一家をとましめ、一郷に及ぼし、遂には、一國をも、富有ならしめんと、心がくるをいふ。さればとて、親戚知己の、一朝にして、資産を失なひ、生活のたつきに、苦しむを見るも、助けなはれまじの、心もなく、己れが財を、貯ふる事のみつとめんか。吝嗇のそしり、免がれざるべし。只、我奢りをいましめ、慈善事業に、つくすこそよけれ。「博愛衆に及ぼせ」とは、畏くも、勅語の大みことばなり。よく、この大御旨を、思ひまつりて、子孫を、敎へみちびかば、自ら、一家の良風となりて、いよ〳〵、とみ榮え、いつかは餘慶の、來らざらんやは。まいて、婦人は、これらの子女を、敎育し、一家を整理する、身なれば、よろづ節儉を守り、折にあひ、時にのぞみ、かの山内夫人の如き、行ひこそ、あらまほしけれと、願ふあまり、拙き筆をも、かへりみず、かくは一言を。

人　　和泉國泉北郡深井村　福原菫子

節儉とは、いかなる事をかいふ。あながちに、白金黄金を愛しみて、一向に、おのが欲をみたし、あるは、其の正しからざる樂しみにあてん爲めにする、拜金守錢奴となるの意にはあらず。鉅萬も、一錢一厘より、大海も、一滴水の注ぎ集まりてなるものなれば、われはわれ、身分相應の衣食住をなして、一尺の帛も、將、一錢の金をも、故なら

して、即ち、其の道にあらざれば費すことなく、公益のため、あるは、自個の爲、萬一の時には、千萬金をも惜むことなく、これをなげうつて、其の用にあつるこそ、是が本意なれ。いさゝか、思ひよれるふしをかくなん。

（以下原稿到着順）

中邨瑞子

いかにいそしみ、入るゝとも、底しなきうつはに、物や溜るべき。されば、夫の暁に出で、星を戴きて歸りつゝ、なりはひに、いそしむとも、家にあるもの、よろづにおごらば、其のかひなかるべし。岩をも流す大川も、其の源をたづぬれば、もぐらの栖、葉末の露のよりつどひしにぞある。されは、少しのものも、心せば、塵も積りて山との例にもれず、つひに、澤ともなりぬべし。鹿爪らしき淺學の講釋はいかゞなれど、婦人の婦は、女に从ふ帚にして、帚は、塵ひじを、あつむるものなり。すべて、女子は、こまかきことも、心して、家を齊ふべきものなれば、斯くは帚になぞらへしなり。されば、萬につゞまやかなるやう、心がくべきなり。

佐々有鄰子

よに、節儉ばかり、かたきおこなひはあらじ。いかんとなれば、節儉を。まもるとおもへは、りんしよくに。おちいり、りんしよくに。陥いらぬ。やうに。つとめむと。すれば、花美にながれ、花美にも。ながれず、りんしよくにも。陥いらず。中庸の道をふみて、人に。まじはり、世に。つくすを、節儉、公益の。中とりもちし。行ひと。こそいふべけれ。

林環子

節はふしと訓み、儉はつゝまやかと訓む。節儉とは、竹なとの節の、やゝ等しき長さにて生ひ出るが如く、財物を、規律正しく整理し、これを費すに當りては、無用の費を省きて、有用の費に充つるをいふなり。されば、節儉とは、やがて、世を救ふべき、經濟の學の源ともなるものといふべし。若し、一國の政にして、節儉を旨とし、入るを計りて出るを制し、無用の費を轉じて、有用の費途に、充つるあらんには、その治蹟は、著く擧り、國富み、民榮ゐて、稜威を四方に輝すこと、いかで難かるべき。若し、また、一家にして、節儉を旨とすれば、一族富み榮ゐて、その名、一郷に響き、郷黨、擧りてその德を慕ふに至るべし。されど、この節儉なるものは、入るを計り、豫め熟慮して、其の充つ可き費途を定むるをもて、その中には、子孫の爲に計り、又は、不慮の災に備へんがため、財を蓄ふることあるを以て、世の人は、節儉を以て、蓄財をなす方法なりと思ひあやまり、無用の費のみか、有用の費にさへも、財を出すを惜み、己が交る友のみか、己が家族をさへ虐げて、ひたすらに、財をつみ蓄へんとす。これをもて、終には、信を社會に失し、世の人々に、指彈せらるゝに至るものあり。かゝる行は、吝嗇といへるものにて、世のいと厭ふべき行ぞかし。儉なれば世に進められ、吝なれば世に捨てらる。儉吝のけじめ、大ならずやは。さるに、世の人々、まゝ、このはじめを、あやまつもの多かれば、心して、節儉の本旨を守り、吝嗇の道に、ゆめ、踏みまよはざらんことを、常に、心懸く可きなり。

大谷津案子

凡、人は、一生の内、何時、不時の、まがつみに逢ふも、計られざるものなり。されば、常に、心を用ゐて、萬一の用意を、なさざる可らず。凡、物事は、はじめにせれば、ならぬを、こは、誰の事なりとて、ないがしろに、なす者なり。如何なる心にや。物は、小さきより、始むれば、たやすきを。大なるより、始めんと

する故に、いと難し。又、餘りに、節倹にすぎて、吝嗇におち入る者あり。こも、又、いと惡なる事にこそ。只、節倹は、無益の費をはぶき、用ゐるべき時に、散ずるをこそ、云ふべけれ。人にして、此の道を悟れば、小にしては、一身を富まし、大にしては、國家の富源となる。いかで、輕々しく、打過すべきやは。

横山芳子

夫れ、言ふは易く、行ふは難きは、世の中、「なべて」の習はしながら、その之を知らざるの人無くして、之を實行する者少なきは、節倹の二字なり。嗚呼、此の二字、至難なる乎。世人、往々、末を先にして、其の本を忘るゝが如し。何となれば、自ら勤めずして、徒に、他人の功蹟を羨み、倹に遠かりて、奢を恣にし、家産の傾くに至りて、頓に、周章狼狽するものあり。是れ、惑へるこの甚しきなり。今は昔、北條時頼をして、其の人たらしめし松下禪尼の訓戒も、猶、此の二字に基するにあらずや。凡そ、人の母たるもの、宜しく、此の意を體し、勤勞、額に汗して、而して、得たる財寶を、吝に陷らず、又、奢に失せず、其の所を守るに、心を用ひ、兒女、教養に細心留意し、實踐躬行、以て、兒女をして、自ら、半銭をも、輕しめざるに至らしめ、遂に、習ひ性と化し、以て、人生、天賦の業を盡さしむると、否は、一に、家庭の針路如何、にあれは、婦女子たるもの、此の責任を、双肩に擔ひ、努、油斷なきこそ、肝要ならめ。

高砂き代子

節倹は、國を富まし、家を起すの基として、我皇御國の國民としては、實に、心措くべき事にて、まして、家を治め、子を育つべき女子たちの、いと〳〵、つゝしむべき事なりかし。さるを、世には、己が身分もかへりみず、はでなる方にのみ、習ひ行き、とこさばに、美食安座を事とする者、いと多かるこそ、聞くもいまはしき事どもなれ。いでや、女子たち、各國富を爭ふ今の世に生れあひて、いかで、此の道に心せでやぞある。常に、質素を旨として、以て、國家の富をはかり、萬一、事の起らん時には、大くしては、國家の爲め、小くしては、夫の爲め、道一すじに盡されんこそ、いと〳〵ねがはしき事なりけれ。



後樂園拜觀記（乾）

山岡螢雪

其の美、其の麗、宇内に冠絶せる我が帝國、如何でか、神韻縹渺たる風趣に乏しからんや。花は香ばし〻一目千樹の春は、吉野の山あり。孤

掉風にうそぶき漁火明滅たる夏は、これ琵琶の湖なり。月は高し八百八島の秋は、松島の夕なり。萬古雪を含み北風山麓をとざす冬は、即ち芙蓉の峰なり。更に又、天の橋立となりては蒼松一帶の白洲、與謝の海中に横はり。嚴島となりては、金殿玉樓波上に浮び、宛然蜃氣樓の如く、風致最佳、其の他擧ぐるに遑あらざるなり。是等は、皆、天の特に附與せられたる自然の美、されど人工の粹を鍾めて以て、詩趣に乏しからざる庭園、又少からず。東京、岡山兩市の後樂園の如きは、蓋其の魁なるものと云ふべし。

前者は、水戸侯の舊邸にして、今は、小石川區造兵工廠構内にて、陸軍省の所轄たり。

後者は、池田侯の舊藩邸にして、藩主綱政其の臣津田重次郎永忠に命じ、貞享年間旭川の水を引き、初めて遊園を作り、茶屋々敷と號く、其の後、後園と稱し、明治四年二月に至り、後樂園と改む。今は岡山縣廳の所屬なり。

已れ年若く、剰へ輦下に筆を走らす日、尚淺きにも關らず、明らけき御代に、生を受け得たる嬉しさ。昨は御苑を拜觀しつまりて俗腸を洗ひ、今又、後樂園拜觀の榮を得たる茲に二度、欽び禁ずる能はず、仍ち、禿筆能く景を敍し、趣を寫すこと叶はず、却て、風致を害する恐れなきにあらざれども、未だ拜觀の榮を荷はざる諸媛の爲めに、聊か其の萬分の一を記し、他日の參考に供せんとす。

頃は、去にし五月二十日、朝まだきより身仕度をいそぎ、同人三橋氏と共に、編輯樓上を離れたるは、午前七時當に昨來の雨雲晴れて、一天拭ふが如く、旭光輝々として、宮城に朝する頃なりき。道を急ぎ、やがて、正門の側なる門を入り、來意を告げて、其の許を受け、轟々たる工塲の響を耳に

しつゝ、レールに依りて進めば、黒く塗りたる内門ありて、こゝをくゞれば、心も自から清く、さながら神韻縹渺たる別天地に入るの感ありき。行路甚だ狹からず、右に左に築かれたる小山の邊、丸く四角く刈込たる杜鵑花の間より東屋を眺めつつ、櫻の花もいつしか根に歸へりて、今や、青葉のみ端々しき樹蔭を過ぎたれば、即ち、唐門につきぬ。前に泉水あり、雅趣掬すべし。

門を入れば、左に谷川の流を隔てゝ、棕櫚山を眺め、箱根の山道を下れば、近江の琵琶湖洋々たり。これ此の園に入る者の、第一に驚嘆する處にして、其の他見る者一つとして、雅趣あらざるはなく、詩的ならざるはなし。されば、其の風光の佳、勝景の美を、獨り樂しむに忍びず、仍ち順次項を分ち、以て、聊か、其の美を諸媛に頒たんと欲するのみ。

●後樂園

其の廣さ方六町餘ありて、昔時は、古木大石庭園に充ち、晝尙暗かりしが、今は大に舊景を減ずると雖ども、尙、又井の頭池より水を引きて、此處彼處に泉水を作り、瀑布を設け、飛沫霰の如く、水流清く、老樹蓊蒼、さながら深山幽谷に入るの思ひあらしむ。實に、東京林泉中の冠たりと謂ふべきなり。

初め、威公頼房、深く山水を賞し、都府に留まるを欲せず、常に山間の僻地に生を遷さんとす。時の將軍大猷公家光、大に憂へ、仍ち都下の名勝を撰び、自ら繪圖を作り、工を督し、財を不顧、當時の庭師徳大寺佐兵衛をして、一大遊園を營み、工成りて頼房に賜ひ、以て、足を都下に駐めしむ。其の次子、義公光圀の代に至り、賓儒朱之瑜をして、更に、各國より奇石佳木を蒐集せしめ、又、

園名、後樂の二字を撰せしむ。是れ此の園の始めなり、されど、已れ學淺く、寡聞にして、未だ其の年代を確めずと雖ども、私に案ずるに、明末の志士舜水朱之瑜が、我が國に逃れたるは、萬治二年なれども、義公の請に應じたるは、實に寛文五年にして、補弼教導十有八年間、而して、寛文、延寶を經て、天和二年四月、年八十三病みて駒込の邸に歿す。彼れ奇骨あり、學博く、經濟の道に通じ、文を能くす。其の撰する處の、後樂園に遊ぶの賦に曰く。

已酉、春三月十九日。櫻花爛發。繁麗偏反。萬卉咸奮。敷二紺綠一以乘レ時。(下略)

云々とある、己酉は、即ち寛文九年なり。されば此前年即ち、寛文八年こそ、園名の始めならめ。實に今茲明治三十四年を去る、二百三十又三年前なり。唐門の傍に標札あり。一讀本園の由來を知るに足らんか。即ち、其の文に曰く、

本園兼水戸藩邸にして其の祖先德川賴房は家康の庶子十一男特愛他子に異るを以て就國を許さず專ら在府副將軍の任たらしむ故を以て元和年間其の邸地を都下の勝地に撰せしむ

抑も本所開府前遠山某の邑居及吉祥寺本妙寺等の所在にして山水の勝致天然に相備たるを以て則吉祥寺を駒込に本妙寺を丸山に移住せしめ其の藩邸に充て三代將軍自ら臨場指揮奬勵費途を不顧當時の技能者德大寺某明人朱舜水をして奇石佳木を各地に蒐集し神田上水を擅に引用し天成の勝地に基き此の名園を經營せしむ更に舜水をして宋の范文正公の士當先ニ天下之憂ニ而憂後ニ天下之樂ニ而樂の語を取り園名となし世に其の意を實行せしむ嘗て園闕を東福門院後水尾院の叡覽に供へ御感賞斜ならざりしとぞ

創始以來數々大石を去り陰を除き喬木を伐り或は枯死上水の制限により水量を減滷し漸々變化舊來の勝景を失ふと雖も尚現在都下の名園を以て兩陛下及東宮殿下數々御臨幸を玉ひ且歐米外客必一覽を乞以て其の名益海外に洽し豈當園の後榮涯りなからんや

昔時は、四時花盛んにして、麗はしく、苟も拜觀を望む者は、貴賤老若の別なく、許されたれば、三々五々、或は酒肉、或は茶菓を攜へ來り、終日

清遊の客多く、以て、大平を歐歌する士民の樂を觀ては、義公も、こよなき樂とせりと、以て、其の寛仁の志を知るに足りなん。

●琴畫亭

潺々たる流水の邊に在る一小屋、義公が、嘗、純忠至誠の大義を明さんと欲し、普く天下の俊才を招き、以て、大日本史、及古儀典禮編纂の緒につきたるは、即ち、此の書齋なるか。杜審言が、水作琴中趣。山疑畫裏看の句の額あり。蓋し、名の因て起る處、筆者は、當年の書家、高松藩の士佐佐木文山なりと云ふ。舊時は、此の亭茅葺にて、素朴の樣なれど、其の實至美を盡し、就中障子の如き、月卿雲客が歌合の色紙、短冊を張りて、いと風雅に、彼處を望めば、石峰ありて樹木茂り、眺め床しき河原書院ありと云へども、今は無く、此の邊、微風瀟々たり。

●唐門

こは、名の如く唐風の門にして、櫻樹をへだて、一奩の池水を扣へ、最清楚なり。これなん、舜水の意匠にかゝり、特に、後樂園の自筆三字を額す。即ち虫喰板に、銅もて字形を顯したる者、欄間には、水邊笹の茂みに、牡丹の艶麗、梅花馥郁として香り、鳳鳥花に戯るゝ樣を刻し、其の技大に見るべし。大內九藏の彫刻せし處。此の門に向て右なるを、錦春門と云へり。

●椶櫚山

唐門をくゞれば、左に谷川の小流あり。昔は、兩岸古木欝蒼晝尙くらくして、椶櫚最多きより名付しと雖ども、今は、椶櫚皆小にして、人目を引くに至らざれど、流石に其の數少からず。

●箱根八里

椶櫚山を左に眺め、谷川の水淙々として物凄く、

古木路を狹みて、陰々日光を漏さず、路の中央に石を敷き、以て、箱根山道の嶮に凝すと云ふ。己、東海道を上下する年に幾度、されど、聖代の恩に浴する身の幸あるかな、未だ知らざる、昔時膝栗毛に、箱根八里は馬でもこすがと唄ひし、峻坂の山路を、今こゝに見んとは。

●蜈蚣山

箱根を下れば、左にありて一大泉水に面す。山高からざれども、棕櫚山の南、白雲嶺の連脈にして、木竹生ひ茂りて山骨を現さず。昔俵藤太秀郷弓矢を取り、琵琶湖中の龍女のために、此の山の主てふ大蜈蚣を斃しゝを以て、名高ければ、特に、ここに寫したるなりと、夫より池畔の明媚を賞しつつ、右に縦の大木をながめ、竜田川に架せられたる小橋を渡れば、くま笹生ひしげりて、吹きかふ風にかしましく。左に西行堂あり。

●龍田川

韓紅に水くゝる大和の龍田川は、今尚、楓樹第一の名所なれど、こゝには、僅に名を留むるのみ。昔時沼岸川の一帯に、大和龍田より楓を移植し、晩秋二月の花より紅なりしと、今は大方枯れたり。

●西行堂

少しく高き處の樹陰に、此頃改築されたる、幽瓢亭あり。小野藏兵衛作の西行の像を安置す。依て名付く、傍に碑あり。烈公齊昭令夫人の筆を染し者、即ち、西行が柳陰の歌なり。

道のへにながるゝしみづ柳かげ
　しばしとてこそ立とまりつれ

碑の裏面には、其の來歴を陳べたる佐藤逸齋の撰文あり。堂に柳陰の二字を額す。筆者は、時の老女左近ありと云ふ。其の有名ある碑、駐歩泉の三字は、烈公の自書と云へり。

●涵徳亭

池に沿ひ、而して道を山の手に取り、行く事僅にして亭に着く。半身池上にありて、大澤川、渡月橋、西湖堤の眺めあり。雅致云ふべからず。昔は、萱葺屋根和作りにて、室に疊を敷きたりしが、明治十三年回祿の災にかゝり、以て現時の風に改築せられたり。室内狹まからず、椅子、卓子などを設け、貴顯の休憩所に充つと云ふ。舊來、單に硝子障子ありしを以て、硝子茶屋の稱ありしが、享保九年大内記林信篤、記文扁額を奉りし以來、名を涵徳と改む、其の文(原漢文)に曰く、

黄門水戸源威公創めて建つる所なり寛永年中將軍家此に遊覽し公と同じく樂む山彩水色森樹清波にして交々平挹一堂中に集め因て一語を書す

台位降祚　涵徳揚光　餘親累世　繼美傳芳
月淸雪白　鳥囀花香　靈德惟大　山高水長

亭前に、彼岸櫻の大木一株あり。垂絲櫻にして地上に垂れ、風趣最も掬すべし。己初めて本園を拜觀したるは、去にし彌生の中ばごろなれば、風靜かに鳥うたひ、今や盛りに咲き亂れたる、花の木かげに停みて、佐保姫の織成花の錦を賞しつゝ、嘗、參議中將源宗堯卿、が此の垂絲櫻を賞する餘り口ずさまれたる、

垂絲春暖百花塲。　滿坐題詞飛羽觴。
好是遨遊殘照裏。　絲々添色惹思光。

の詩を繰り返しつゝ、去るを忘れたるも、昨日今日の思ひなりしに、ひま行く駒の足早く、いつしか、南風涼しく、至る處みどり濃やかに、垂絲櫻も、さながら天津乙女の羽衣の如く、靑地錦のうすぎぬ中天にかゝり、風にゆらるゝ樣の床しさ。實に、瀾熳たる花よりも一入のながめあり。

(未　完)

人食ひ

小流生

むかし〳〵、或外國に、人食ひが住むで居ました、たゞ人食と申しましても、これはまた少々毛色が異つて、成人や、老人、小供では無く、岩見重太郎に對治せられた猩々の生れかはりか、小娘さんでなくつてはいやだと申すことでした。それで、一人の孃樣が、人食ひのとこへ連れて行かれると、直に、またその次のを誰れか、順備して置かぬければなりませぬ。誰れをやッたものかといふのに、一切鬮で以て極めるので、如何なに金持であらうが、貧乏人であらうが、王樣でも、乞食でも、誰彼れといふ區別なく、この鬮をひかぬわけには行かぬ、それといふは、この人食ひ――名は無心齋――は、至極平等主義のものだからといふことでした。それで或時、鬮をひきました處が、如何した不運でせう、王樣の一番可愛い御姫樣が、その鬮にわたられまして、王樣の力でも、こればかりは、如何することも出來ませぬ。

王樣も色々御心配になりまして、御家來のうち誰れでも身がはりにするから、何卒私の娘だけは、食ふことを許るして吳れと、仰ッしやッたけれども、人食ひは、イヤ〳〵と、頭を横にふりました、

『それはいけません、貴方に御都合がよければ、また誰れかに不都合になる、いけません〳〵』

と申すものですから、王樣も仕方がありません、で、御家來を御呼びになッて、誰れでも、私の娘の命を扶けてやッて吳れるものには、望み通りの御褒美は勿論、娘もやつて、婿にする、と申されましたが、誰れとて、無心齋を相手に、王の姫樣を、取もどさうといふ程の強い人は居りません。

所が、一人若い兵隊さんが、この王様の困ッてられる様子を聞きまして、一番手柄をするのは、この時に限ると思ひましたものですから、ツカツカと王様の前へ進み出まして
『ハイ御免下さいまし、私が一ッ命がけでやッて見たいと存じますが、御許し下さいませうか』
王様は、ヂッとこの兵隊を御覧になりますると、なか〳〵、力も強さうだし、正直さうの面を致して居りますので、大きに安心されまして
許す處ではない、私から頼むから、何卒か一骨折、やッて呉れ、頼む』
と申されまして、何とか申します名刀やら、金銀やらを下さいました。
兵隊さんは「有り難う」とも、「左様なら」とも、何ともいはず、勿論、自分のうちへも歸らず、その足で飛び出しましたが、人食ひの無心齋の居る城は、山をこえ、河をわたるので、余程遠いものですから、途中でいろんな所を通りますが、丁度崖道で、一足踏み滑べると、幾千尺の深い〳〵谷へ陥るし、又一方は高い〳〵險はしい山といふ所へやッてまゐりますと、路一杯に、四ッ脚をひろげて、驢馬が死んで居るのに、右には獅子、左には熊、尾の方には鷲が居て、鼻の上には蠅がとまつて、兵隊さん通りやうもありませぬ。
蠅は身が輕いものですから、一番にブーンといッて、
兵隊さんの耳の所へ、飛むで行き、
『實は私共四人のものは、この驢馬の肉を分取りしやうと思ッてるのですが、皆ンな、慾張ッて、兎角、自身のを成るべく澤山にしやうとするのです。それでは如何もならむから、如何か、誰れも損をせぬ様、かたおちの無い様に分けたい

と思ふについては、是非誰れか、別の人の手を借りなければならず、誰れか來て呉れゝばよいと思ッてました所で、何卒か、御面倒でもありませうが、私共四人に、誰れにも損のゆかぬ樣、かたおちの無いやう、この驢馬の肉を分けては下さるまいか』

と、かういふものですから兵隊も一寸困ッて、蠅位の氣に入らなかッた所で、如何にもならうが、獅子、鷲と來ては、大きに閉口ぢや……。併し待てよ。こゝに王樣から戴いた名刀がある、これで驢馬を、肉といはゞ、骨といはず、都合良い樣に切つて、うまく蠅の賴みを聽いてやらうと、

『よろしい〳〵。御易い御用だ、己がうまく、やッて見やう』

と、驢馬の肉や骨を截りまして、

『汝さん、おい獅子どん、おまへには、先づ第一に、頭の處をわげやう。何故かといふに、頭は腦のある所、躰中一番肝要な所で、おまへは丁度獸の大將、百獸の王ともいはれるから、それが宜かろうと思ふ。それから鷲さんは、鳥の王といふから、驢馬の心臟といふ、大切な所をお取ンなさい。次が熊ちやんだが、君には、前脚の太股がよからう。蠅君は後脚を嘗めたまへ』

と、一々分けて、殘ッた處も、夫々片手落のないやうに、わけてやりました。それで獅子も鷲も、平生獸類や鳥類を威かすのとは、打ッて變ッた、やさしい鳴きかたをして、お禮を申しまするし、熊は例の首を無やみと振ッて喜び、蠅は、たゞブーン〳〵といッてるといふ次第。

蠅は、先づ兵隊さんの中指を嘗めましていふには。

『いつでも貴方が蠅になりたいと思召したら、こ

の私が嘗め所を、三度撫で下されば、直に貴方は蠅になれます。』

といひ、鷲は自分の右の翼から、一本羽子をぬきとりまして。

『この羽子さへあれば、貴方が鷲になれます。この羽子を右の腑へクッ付けて、二三度バタ〳〵とれやんなされば、直に體が輕ろくなつて、飛びあるけます。』

とまだ話のすまない内に、獅子は、

『人間さん〳〵、わたしは貴方に、爪を一つあげやう』

といひ、熊は

『マア、おいでなさい、お禮として、一ッ抱いて温めてあげやう……』

といふが、熊等に抱かれて、あの舌で嘗められやうものなら、アンマリ良い心地も仕ませんから、兵隊は、

『蠅にもなれ、鷲にもなれ、獅子さんの爪ももらつて、わたしの望は叶ひさうだから、おまへの御深切は、お辭だけうけて、マアおきませう』

と、例の鷲の羽子をつけて、バタ〳〵とやりますと、不思議や、体は鳥になつて、例の人食ひの城の近傍まで、まゐりまして、鷲の眼で鋭く、見おろしますと、城は中々堅固に出來て、姫様の牢屋は別段に嚴しくしてあります。そこで、城の松の木から下りて、人間になり、また例の指を撫で、蠅になッて、姫様の牢の窓から這入りこみました。姫様は丁度御飯の最中で、それは〳〵、御馳走はッかりで、人食ひが、近いうちに姫様を食はふといふのですから、充分、姫様に、美いものを食はして、少しでも、姫様の肉をうまく仕ておかうとするのです。

兵隊は姫様のお膳の周圍や、鼻のさきをブンブンいッてますけれども、姫様は兵隊さんが蠅にならうとは知りませぬから、『エヽうるさい蠅で、わりやしない』と、逐ひまわされます。で、兵隊さんは原の体にもどッて、

『モシ〳〵、姫様〳〵　わたしは貴殿のお父様のとこの兵隊ですよ』

といッて、如何いふ工合にして、救け出さうかと相談しましたが、流石に用心堅固で、仕方ありません。

それで、兵隊が申しまするは、姫様〳〵、こゝの無心齋は、その名の通り、いつも心が何處かに藏してあるのだといひますから、その心さへ、もとの通り入れてやれば、最う亂暴もしまひと思ひます。如何かして、その心の在り處を聽いて下さるまいか、何處に在つても、わたしが探がしてまゐります……誰れやら、足おとが致しますから、見つからてないまへに……、左樣なら』と、また蠅になッて、往ッてしまゐました。

丁度入り更ッて、無心齋の人食ひがやッて來まして、姫様は、何時になく、ニコ〳〵して、出むかひまして、無心齋の心は、何處へ藏してゐるか、知らして呉れと申しました、左樣な話になると、無心齋も、平生の鬼々しい樣子はなく、全くしはたれて、

『私は心こそ奪られたれ、頭腦がないのではない。卿が誰れにもいはぬとなれば、話しても宜いが、また、如何なことで、人に知れるとも、限ぎらぬ』

と中々、藏し所を明かしさうに見えませぬでしたが、到頭、姫様の熱心にうごかされて、惡魔が無心齋の心を奪つて、之を遠い〳〵、紅海の海の底

へ埋めてしまッて、如何ともすることが出來ない。といふことを白状させました。

やがて、兵隊さんの蝿がやッて來まして、姫様からこんな事を逐一聞いて、急いで鷲にあり、風の神の處へやつて往きました、丁度風の神は四人とも留主で、母様が一人留守番して居たものですから、これに詳はしいことを話しますと、このお婆様、中々の善人で、それでは早速子息のかへり次第、お供をさせませう、と話してるうちに、東風がかへッてまゐりましたから、疲れてるものを、直とお供しろと吩附まして、東風は早速、兵隊さんの鷲を載ッけて、直に疾風になッて、駈けて往きました。こんな日に、支那の海に、乘り出したのは宜い迷惑です。途中で一夜、印度ヰンヂヤの山中で一泊しまして、翌日愈々紅海までまゐりましたが、風と二人連で探がしまわッては、海も穏かでありませんから、風には海岸で待てゝ貰らッて、魚にたのんで、例の心の入ッてる小筐を探してもらひますと、一時間もたゝないうちに、魚はかへッてまゐッて、成程筐はあるにはあるが大きなもので、迚ても、魚の手、ではない、鰭には合はぬと申すことでした折角こゝまで來て、その筐を取らずにかへるわけにもゆかずと、風と兵隊さんは困ッてるところへ、大口魚がやッてまゐりまして『私に一つ御用を仰せ付けられたい』といふものですから、『それは妙ぢや、大口魚なら、鰭はきかずとも、口でもッて來るだらう』と、早速大口魚にたのみました。

大口魚が、海の中から、持ッてまゐッた、筐は美くしいといひ、丈夫いといひ、迚ても人間業で出來るものではありませぬ。併しまァ寶が手に入ッて、大願成就ですから、兵隊さんは喜んだ

の、喜むないのといッて、それは話にならぬ位、舞ふやら、躍るやらで、風もこれまで度々、鷲にも出會ひましたが、まだ鷲の舞やら、躍やらは見たことがないといッて、轉び廻ッて、面白がッてゐます。

やがて、鷲は風にも禮をいひ、大口魚には特別に禮をして、また風に載ッけて貰らッて、かへッて來まして、無心齋の城の前まで來ると、商賣人の姿にかはりまして、

『私は、天竺の方から來た商賣人ですが、こゝの殿樣にお眼にかけて、取換ッこをしたいものがある』

といふものでこゝから、門番はその通りを取次ぎますと、心の無いものは、ツンケンドンなもので、

『何を云ふのだ、失禮な、商賣人風情と面會はならぬ、殊にまた、買ッて呉れろなら兎も角、人を貧乏人と思ッてやがるか、取り換へッこなんどいゝふか』

と恐ろしい權幕でした。が、兵隊さんの商賣人は中〱聽きませぬ、

『是非お目通りが願ひたう御座います。殿樣にお眼にかければ、如何しても、一番欲しいものだと仰ッしやるに極まッてます。』

と、かう申しますから、無心齋も會ふて見る氣になりまして、

『何だい、貴樣の持ッて來たものは』

と、いひなり食ひ付きさうでしたが、兵隊さんは、びりともしませず、

『實は私は、紅海の近邊で、珍らしいものを獲りまして、是非御前の御眼にかけて、お取換を願ひたいので御座います、實はこの箱の中のものなので』

と、恭しく箱を出しますと、心の無いものは、無作法ですから、イキナリ蓋を開けやうとしますから、

『どつこい、さうは行きませぬ、先づ取り換へて下さる品を承はらないでは――』

『何と取りかへるのだ』

『實は王の姫樣とです』

『それはならぬ、姫はいまから煮やうと思つて、今朝からその支度がしてあるのだい』

『しかし、その箱の中の品次第では、姫樣を下さるだらうと思ふがどうです！、その箱には、貴方の心が入ッてるのですよ』

と、これまでの一伍一什を語り出しましたので、無心齋は、夢ではないかと、大に喜び、

『左樣であッたか、それが眞實なら、若し百人の王の姫とでも、取りかへる』

『いへ、私は一人だけ戴けばよろしいのです』

と、箱をあけて、無心齋にわたすと、無心齋は、大な口をあけて、グット自分の心をのみ込みました。

すると、魔が解けて、最う人食ひも居らず、姫樣も縛られて居らず、無心齋は有心齋になッて、兵隊は王の養子になり、姫樣はこの兵隊さんと夫婦になり、國內安土になりましたとサ、めでたし。めでたし。

芳野記行（其の二）

下田義天類

うつの山うつゝぬかして夢の間に
　越ゆるも御代のめぐみなるらむ

大井川はいきすぎにけむ。しらず。汽車窓より首

をさしいだしてわたりを見わたせどあやめもわかぬやみの夜なればいづこともわき難し、車のとゞまる所々にて驛の名を夢うつゝの間にきゝながしつゝすぎゆく。かたはらなる人折々ものなど云ひかくれどもうるさければほどほどにあへしらふのみにて心にもいれず。すこしさう〴〵しきこゝちもすれば頬にひさごをたのもし人にしつゝなむなぐさめける。天龍川は橋の上をとゞろきわたる車のひゞきにこそ、それと定かに知られしが。濱松をもすぎ今切をわたりたれど右にひだりにみるべきものもなし。このわたりのけしきひるならましかはと思へどかひなし。

海づらは見えわかねどもよるのきさ
　　しかすがにてぞ窓もさゝれね

しかすがのわたりは今の白須賀のわたりなりとか。しかすがをしらすかとはよてなまるべくもあらぬやうなれど今といにしへとものいひのかはれることは思ひの外なることもおほかればあらそひがたし。

豐橋を午後十時五十八分に發車して御油と蒲郡とのあひだにかゝる。このわたりの海づらことに見まほしく思はるゝ所なれどいかゞはせん。されど例の滊車窓はとざし難くて我が居る所の二窓をあけ放ちつればわたりの人々はあな寒やとてつぶやくげなり。げにふき入るゝ夜風は春たけたりとはいへど猶いと身にしみて堪へ難きやうになりぬ。毛糸のあつき莫大小をかみしもに着込みてあつ手の綾羅紗の服に身をまとひその上に薄手なれども袷せの外套をおほひたれば夜更けぬともこれにて寒からじとおもひしを、身ぬちこと〴〵くぬくまりたる所もあらずなりにたれば、益なきものずきをして風もこそひけと獨ごちつゝ窓をとざし敷も

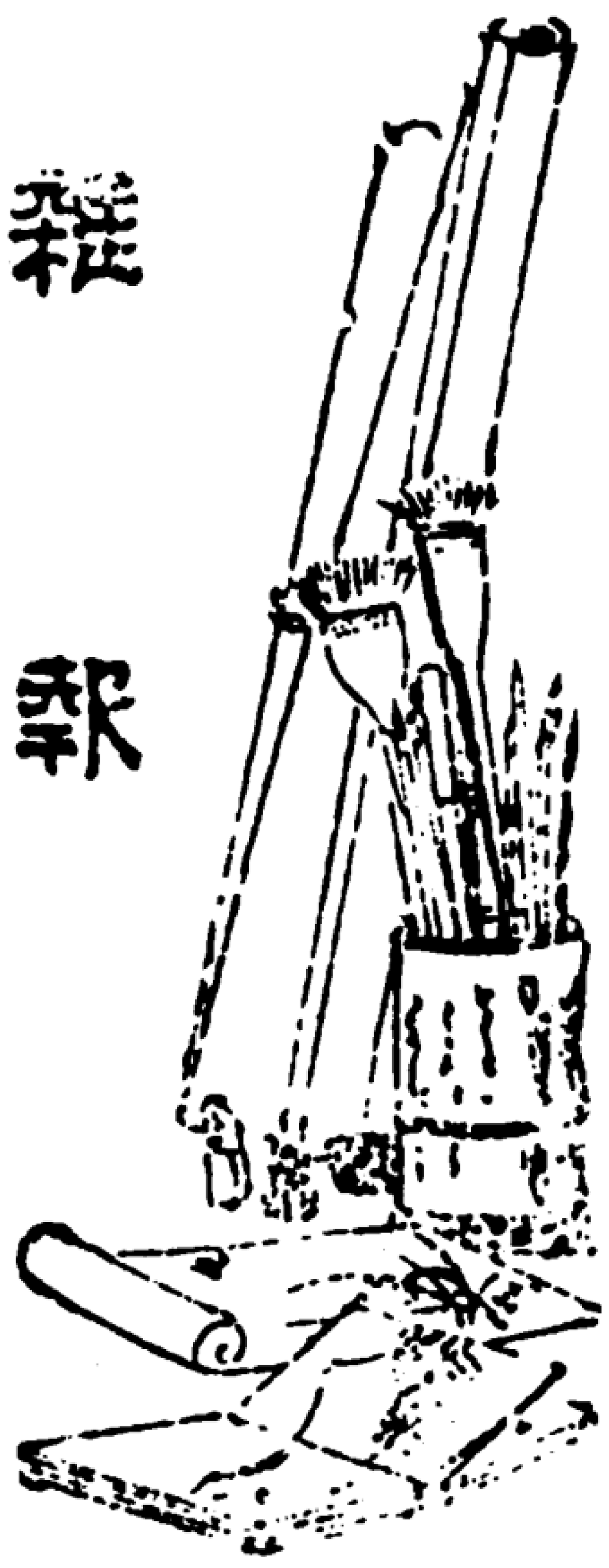
のをひきかつぎて、もろ膝いだきて、かたすみにうづくまり居しに、またも夢路をたどりそめぬ。名古屋にて時計を見れば午前の一時五分なりけり。いでたちにしはきのふとなりて早く十八日のきたるをしる。

十八日午前一時十分名古屋を發車して清洲一の宮をすぎ木曾川を越えて美濃路に入りぬ。このわたりはすべてまだ見知らぬ所なれどゆかしきことかぎりなけれどたゞ鐵道線路の信號の燈火なか星のごとくに高くかゝれるを見るのみにて田も畑も家もくらも見え分かれねば、あたらしきこと限りなし。岐阜大垣を經て垂井關ヶ原などの停車場をすぐる間は頻にいにしへのことゞも思ひ出さるゝこと多かれども見れども見えず聞く人もなし。柏原、長岡、醒が井をすぎて米原にいたる。三時四十二分なり。こゝに暫車をとゞめて三時五十二分に運轉を始めたり。あけはなるゝに早程もなかるべし。とく明けよかしと念じつゝぬるに此の二三夜のつかれ俄にいできたるにや。ねむたきことといふばかりなし。強ひて目をおしひらかむとすれどやゝもすれば合さりがちなり。彦根をすぎ能登川にいたれる頃よりやゝあたりも見えそめたり。批把湖の水ゆほびかに松の梢どもよりみわたさるゝにたゝなはれる山々には雪にやあらむ。雲にやあらむ。あるは咲きをゝれる花の梢にもやあらむとうたがはるゝもの所々にあり。うれしきことかぎりなし。八幡、野洲のほどにてなごりなくあけわたりぬ。菜の花見わたすかぎり咲きつゞきたり。

こゝちよや野洲のわたりの朝ぼらけ
めさむるばかりつゞく菜の花

さきに花かとうたがはれしは木草のはえぬ間より

白き砂の流れいだしたるおとありけり。六時廿一分京都に入る。たゞちに人力車をはしらせて阿知和安彦の許にいたる。人々よろこびて立はしれり。



雜報

○宮廷錄事

●迪宮初御參內

卯月廿九日の吉辰を以て、綠濃き我竹の園生に御降誕ましく〵たる、迪宮裕仁親王殿下には、其後日夜御成長あらせられ、去にし廿八日は、早くも御治定遊ばされたる、初御參內の當日とは成りぬ。申すも畏き事ながら、百敷の大內山の御歡び、何に譬へんものなかるべく、靑山御所にては、午前八時と申すに、既に其々の御準備を整へさせられ、前日還啓の　皇太子殿下には御朝餐後迪宮殿下に御對顔あらせられたり。當日迪宮殿下の御顔ばせ、何んとなく一層男々しかりしと承るも有り難し。

斯くて殿下には、緋の御重ねを召させられ、萬里小路女官御陪乘、九時三十分御出門、赤坂見附より新道通り三宅坂に出で、堀端に沿ひ半藏門より吹上門に入る。賢所東門にて御下車、賢所にては午前九時より岩倉掌典長、竹屋、宮地、北鄕、藏田、九條、園池、宗、久我等各掌典出仕御殿の粧飾を爲し、式部職よりは稻葉、戶田(康泰)兩式部官着床、奏樂の間に賢所、皇靈殿、神殿御開扉、竹屋、宮地兩掌典神饌を供し、岩倉掌典長恭しく祝詞を奏し、迪宮殿下には正十時、

中山太夫に抱かせられて、親しく賢所に御玉串を奉り給ひ、御拜あり、畢て、皇靈殿、神殿には、中山太夫御代拜を奉仕して退下、式の如く奏樂の間に神饌を撤して、御閉扉、此に御參拜の御式を終らせられ、殿下には賢所東門外より再び御乘車、道灌門外庭なる東門を經て、北御車寄より宮中に御參內相成りたり。

此日　天皇皇后兩陛下には十時三十分御座所に出御、親しく迪宮殿下に御對顏あらせられたり。兩陛下共御氣色特の外麗はしく、御感斜ならざりし由にて、尙　兩陛下より御附の人々に、種々有り難き御諚を賜りたりと承れり。又た、殿下には右御對顏終り間もなく青山御所に還御あらせられぬ。

今日は、恰も　皇后陛下の御誕辰地久節に當りましたれば、百官の參賀を受させられ、御祝酒を賜はる吉日なるも、深き御宿緣とや申し奉らん。

今思ひ奉れば、御名命の當日は、端午の吉辰なりしさへあるに、今日の御參內は、この祝日に合せまゐらせたる事の、期せざりしとはいへど、目出度も又、目出度げに、聖代の吉兆とぞいふべき、折から、時も若葉の繁り、樹は欣々として榮に向ふといひけんは、直ちに、皇孫の御上の壽詞として、臣民の嬉しさを表し奉つるにあまりありぬべし。

●東宮御參內

迪宮初御參內に付き葉山御用邸より其の前日、還啓あらせられたる、皇太子殿下には、廿八日朝、東宮御所に於て百官の參賀を受けさせられ、御朝餐後迪宮殿下と御對顏、間もなく、同殿下御參內に引續き、午前十時御出門、高辻侍從長御陪乘、村木武官長其他數名の供奉にて、同三十分御參內兩陛下に御對顏、種々御物語ありたる上、御內宴

に列せられたり。

●宮中御內宴

去にし廿八日は、地久節の御當日にて、迪宮殿下初御參內の御祝ひを兼ね、正午宮中千種の間に於て御內宴を開かせられ、兩陛下臨御、皇太子殿下を始め奉り、閑院宮載仁親王、山階宮菊麿王、同妃各殿下を召させられ、九條大勳位、德大寺侍從長、田中宮內大臣、同夫人、川村樞密顧問官同夫人、岩倉侍從職幹事、香川皇后宮大夫、鷹司公爵、岡澤侍從武官長、中山東宮大夫、川口宮內次官、同夫人、山口宮中顧問官、長崎調度局長、同夫人等に御陪食仰付られたり

●地久節賜宴

地久節奉祝の爲め、西園寺臨時首相、大山、西鄉各元帥、田中宮內山本海軍、兒玉陸軍、加藤外務金子司法、末松內務、原遞信、松田文部、林農商務の各大臣、松方、井上、土方、板垣、榎本の各大臣待遇、東久世樞密院副議長、野村、副島、田中の各顧問官、桂大將、野津敎育總監、伊東軍令部長幷に宮內省勅、奏任官、一同は、其の日午前十一時三十分參內し桐の間に於て、皇后陛下に拜謁仰付けられ、畢て、豐明殿に於て酒饌を賜りたりと。

●御料理御贈進　地久節參賀の人々に對し、豐明殿に於て、酒饌を賜はりたるは右の如くなるが皇后陛下には、同日午後三時皇太子、同妃兩殿下に對し、御料理壹臺を御贈進あそばされたる由。

●東宮妃及迪宮兩殿下

●東宮妃御枕直　去にし十九日は、東宮妃殿下御枕直しの當日に付、兩陛下より御尋として、侍從女官等を東宮御所に差遣はされたりき。

●迪宮御乳　漏れ承はる所によれば、裕仁親

王殿下には、別に御乳母を置かせられず、御實母妃殿下の御乳と、牛乳とを召させらるゝ由あるが右は、妃殿下頗る御健勝に渉らせらるゝより、其の御乳を召さるゝこと、兩殿下の御爲め、至極宜敷かるべしと、侍醫の言上せるが故なりと、有難き事にこそ

●…●…●…●…●

●迪宮御用邸の新築　裕仁親王殿下は、御養育主任、川村伯邸へ御移轉相成るべしとのことなりしが、此程御模樣御變り、東宮御所内に、新御殿御建築のことに、御内定相成たる由とぞ。

●…●…●…●…●

●迪宮御消息奏上　過御命名の御日より、畏くも、兩陛下には、日々御使として、侍從、女官等を東宮御所に差遣はされ、迪宮殿下御近況を聞召さるゝ由、御愛情のこまやかにましますこそ、いと目出度けれ。

●陛下の御歌

高崎御歌所長が或る人に語りたりと云ふを聞に、曰く、

陛下の御製ですか、實に申すも畏こけれど、御高手にわらせらるゝことで晝間は、萬機の御政務が御多端であるから、毎夜々々間に御詠わらせらるゝが、大概一夜に廿七八首から三十首で、御製が出れば、御下げになつて拝見致して居ります。

私は、一昨年から病臥しましたが、昨年一月左日に、故税所敦子刀自が御使に參られ、精神に異狀がなければ、是迄通り御製を拝見するやう、但し、強て勉めるには及ばぬとの忝けなき仰せで、私は、精神に異狀は厶いません、只病室で拝見は恐れ多いとでは厶りまするが、若し御聽許を蒙むりましたならば、どうか拝見仰付られたう厶いますと、御答へに及びますと、夫で苦うないとの仰せで、其の後は、一週間に五六十首づゝ御下げに

あり、丁度私が一年五ヶ月計り、病臥の中、日曜を除き全く御用を缺たのは、九日程で厶います。此頃は政務御多端の爲め、歌の御會も厶いませんが、以前同會に臨御あらせらるゝ時は、大抵一番に御製あらせられ、列座の者はいづれも恐れ入りまして厶います。

夫れで、明治二十五年に私が、初めて御製を拜見致しましてから、此三月までに、凡そ、三万七千首の多きに及びます、また、御詠草は、女官が淨書致しましたのを、御下げになるので厶います。皇后陛下もまた、御好であらせらるゝが、之は御數は少なく、大抵十首づゝ程、一週間、二回御下げに相成ます。斯ることを申上るは、實に恐れ多う厶いますが、然し有難き兩陛下が聖徳坤儀の程を忠誠なる臣民に知らすも、決して惡しうあるまじと思へば、つひ御談話申したので厶います。

●海軍大學校臨御

天皇陛下には、豫て仰出されし如く、去にし日午前九時三十分御出門、德大寺侍從長御陪乘、岡澤侍從武官長、川口宮內次官、宮本侍從武官、山內宮內書記官、廣幡侍從、佐和、慈光寺兩侍從試補石川侍醫の諸氏供奉を承り、御順路を經て、築地なる海軍大學校の卒業式に臨御あらせられ、同校長心得坂本大佐の御先導にて、便殿に入らせられ、夫れぞれ拜謁仰付られ、而して式場に臨御あそばし、岡澤侍從武官長をして、優等者七名に、軍刀一振、或は、銀側時計一個御下賜、終つて、陛下には、再び便殿に入御、御少憩の後、午後○時十五分を以て、還御仰出されたりとぞ。

●皇后宮行啓

●●●●●●●

●小石川植物園行啓　皇后陛下には、豫て仰出されし如く、去にし十四日午前十時卅分御出門、

高倉典侍御陪乘、香川大夫、山内亮、田中書記官姉小路掌侍、六角權掌侍、堀川七等出仕等供奉御順路を經て、小石川植物園へ行啓あらせられ、御休息所にて暫時御休憩の上、園内を御散歩、午餐を召させられて後、尚種々の御慰みありて、午後三時三十分還啓仰出されたり。其の御途上、拜觀の東京盲唖學校生徒を御覽あらせられ、翌十五日右生徒一同へ御菓子を下し賜はり、職員生徒一同感涙に咽びたる由。

●慈惠病院行啓

皇后陛下には、豫て仰出されし如く、去にし廿七日午後二時御出門、高倉典侍御陪乘、香川皇后宮大夫、山内同宮亮、田中同勤務、小池、吉田兩權掌侍、三上七等出仕、岩佐侍醫等、供奉にて御順路、芝愛宕町なる慈惠醫院に行啓、二時二十五分着御あらせられたり。當日參院の方々には、一條公、鍋島公、松方、川村、戸田各伯、田中、青木、伊東、各子三宮、井上、南部各男爵夫人、川口宮内次官、同夫人、實吉男爵、同夫人、長崎式部官、同夫人、東郷司令長官夫人等數十名にして、慈惠醫院生徒及、看護婦と共に、同院門内の兩側に整列奉迎し、陛下には奏樂中に御降車、直ちに幹事長（有栖川宮妃殿下御差支にて御不參）代理高木同院長の御先導にて御休憩所へ入御、參院の貴婦人、及院長役員等に拜謁仰付られ、同二時三十分奏樂中便殿に臨御高木院長は、醫院第十四回報告を棒呈且つ其要領を言上し、續ひて卒業看護婦生徒十三名に卒業證書を授與し、畢て、各病室御巡覽の上再び休憩所へ入御、院長を御前に召させられ、同院へ金五百圓を、又各現在患者五十二名に御菓子料として、各金一圓宛を御下賜相成り、同三時四十五分還啓仰出されたり。尚當日の卒業生人名は左の如し。

柴山しゅん　丸山そう　樋口さだ
松本ぎん　秋元たき　吉田まつ
川村こと　玉置りう　伊藤ゆき
笹川せい　堀村かね　牧野ふみ
藤山たまゑ

●皇后陛下御買上品●●●●●●

皇后陛下には、去ぬる三十日上野公園第五次、漆工競技會へ行啓の節、御熱心に陳列品を御巡覧遊され、御目に止りたる品品の中親しく御撰定の上、御用品となりたるもの左の如く、代價は、總て二千百四十三圓廿錢なりと。

一 總黒川光絵付烟草盆　東京　石井彦次郎
一 黒棗形盆　同　河村文彌
一 香棚春慶塗　岐阜　福田吉郎兵衛
一 丸形漆絵筆筒　富山　金森治朔
一 香棚　同　富田友太郎
一 青貝模様菓子器　同　金森平太郎
一 春慶本膳　茨城　久保清吉
一 黒竹鶴硯箱　石川　北川五平
一 摘金扇流蒔絵角盆　同　金水堂
一 松竹梅蒔絵角盆　同　同人
一 堆朱稲穂高硯箱　新潟　小杉航八郎
一 緋色桐鳳凰手箱　石川　田谷彦平
一 香棚形小箪笥　富山　金森義太郎
一 舞女二人置物蒔付　東京　澤田銀次郎
一 帆立貝香箱波に月の蒔　同　吉田清太郎
一 公雛の圖硯箱　静岡　萩原元次郎
一 蠟色内梨子地桑眼菊紛料紙箱　同　永谷兵右衛門
一 同内梨子地葛蒲絵一組　同　同人
一 菊蒔手箱　香川　宮武嘉吉
一 同硯箱　同　久保敬治
一 老鶴手形　京都　川上幸三郎
一 二重車　奈良　森田清太郎
一 三棚掛小道具付　東京　静岡常兵衛
一 馬地蒔絵硯箱　東京　福山庄太郎
一 貼の圖文臺硯箱　同　梶芳造

因に宮内省よりは、東園侍従美術協會展覧會に來場し、御用品として、左の品々を買上らる。

一 金製岩神楽手釦　海野勝民作　關口一也
一 金白金製手釦　飯川榮太郎

一銀製鍍銀地板　來燕歸雁の圖香合　川上勝春
一蘭亭の圖　野口小蘋
一月落雁の圖　久保田米洲
一長春遊狗の圖　山田松溪

○表彰錄

●無上の光榮　先程、皇孫御降誕の砌、妃殿下の御産屋近く侍うて御介抱申上げたる、我日本赤十字社の看護婦田中のぶ子、高田やを子、加藤まさ子三名の中、のぶ子の身上は、前號紙上に記したれば、此度は、やを子の事を記さんに、即ち左の如し。

やを子は、兵庫縣津名郡洲本町字幸町三十七番邸高田德太郎の妹にて、明治三年四月の生れなり。幼少の頃より品行人に勝れて、一鄕の模範と稱せられしが、小學校にありし頃にも學蹟衆に拔んで、中にも書に巧なりしかば、敎師も前途に望を囑したりしに、二十七年の春、即ち二十五歲の時、我赤十字社の定期看護婦志願者を募集せるを見て之に應ぜんと上京し、同社に赴きて試驗を受けたるが見事に及第したれば、四月十六日より同社病院へ入りて其修業をなしたり。然るに間もなく清國との戰爭起りたるが、當時は、看護婦の拂底を告げ居たる所なりしより、やを子は、修業中なりしに關はらず、忽ち採用せられて實務に從ふことゝなり翌二十八年二月十二日より三分員の內へ加はりて、東京にての救護員となり、東京陸軍豫備病院に至りて、六月三十日迄負傷軍人の看護に從事せり。其後、病院へ歸りて修業し居りしに、翌二十九年六月に至り巖手縣にて海嘯の慘事あり、三陸の人々數多死傷したりしかば、のぶ子は又、同月二十九日、赤十字社救護看護婦として、即日

より同地へ出張を命せられ、同年八月二日迄同地山田町の救護所にありて、可憐ある被害者を看護したり。是より先き同年六月一日、赤十字社より二十八年戰役の際の慰勞として金十二圓、又賞勳局より同賞與として金七圓、又、外に從軍紀章をも授與せられしが、後に至り海嘯負傷者の救護に力を盡したる功を以て、赤十字社より慰勞として金七圓を與へられたり。夫より三十年四月同病院を卒業し、相變らず同社の救護事業に從事し居りしが、翌三十一年十一月に至りて一級甲俸に昇進し、昨年北清事件の起るや、廣島へ派遣を命ぜられて同地衞戍病院へ至り、我負傷者を看護したり。其後、同事件の落着と共に歸京し同社病院へ勤務し居りしに先月二十日に至り、妃殿下御分娩の期近づきたるを以て、前記二名と共に、東宮御所へ召されて今回の光榮に預りたる次第あり。今後は前記二名と共に河村伯邸へ赴きて、皇孫殿下に侍き奉る事、尙前號のぶ子の條に記したる如し。附ていふ、やを子は目下同社の正社員にて前號に漏したるが、田中のぶ子も、同じく、正社員ありといふ。（未完、富士）

●孝子の建碑 ●●●●●● 千葉縣下にて、義人の名ありし安房郡南三原村の農夫加藤七平氏は、孝子影山傳藏の爲めに、建碑せんと遊說中なりしが、此度同郡豐田村の影山與茂作、及び學校敎員庄司龜太郎の二氏が發起となり、去ぬる一日を以て、沓見區の諏訪神社境內に建碑し、追て其式を擧げたり。同碑は、竪五尺幅三尺の根府川石にて、孝子傳藏之碑と刻しあり。傳藏の遺族影山定吉氏は、建碑盡力者に謝禮として、孝字を記せる盃一個宛を贈與したりと、げに、珍らしき義人と云ふべし。

●夫を溺せて京都行 ●●●●●● 鳥取縣安濃郡鳥井村大字

鳥井和田吉郎兵衛(五十九)は、數十年前薪を取らんとて山に行き、木より落ちて足を折り、爾來不具物となり、室内に籠りて竹細工に其の日を送りけるが、妻りヨ(五十)は、夫の足立たぬやうになりてより、晝は農事を營み、又竹細工物を賣歩き、其の閑々には、糸を操りて手内職をもなし、夫をして不自由なからしめず、又天氣好き時は夫を脊負ふて田畑に出で、作柄などを見せては、慰めなどし、五六年前同縣知事之を聞き、賞與せしこともありてりヨは、其後益々勵を爲して夫に事へけるが、吉郎兵衛豫て、本願寺に參詣せんとの望みありしより、りヨは、日夜盡瘁して貯金をなし、種々工夫を回らし、一輛の躄車を製し、吉郎兵衛を之に乘せて、二十五日京都に向つて出發したるが、村民等之に感じ金員を醸出して、其の到着先に送らんと協議し居れりと。

●●●孝行車　豫て報じたる、陸中の孝子鈴木平七につき、彰善會々長高崎正風翁の談話せられしを聞に、即ち、

鈴木平七の孝行の談話は、既に各新聞に出まして から、夫を見て實際か什麼であるかと思つたから、彰善會常務主事の延原正孝に其の實際を確めに遣つた。所が延原が本人に遇つて見た樣子、且つ又其萬世館即ち神田連雀町十八番地の萬世橋の傍らの宿屋辻井仁四郎と云ふものが、語る所を聞いても先づ信用が於けると云ふので、夫れで間違ひ無いと思つたから、去る五月一日當邸へ招んだは即ち、鈴木平七、其母松、萬世館の主人辻井仁四郎の三人であつた。先づ應接間に通し初對面の挨拶濟みて咄を聞いて見た所が、孝子は、磐手縣下陸中國水澤町八百二番地の平民で鈴木平七と云ふもので、年は五十三才、母は七十才である。而

かして矢張り其時にも例の車に乘せて引いて來た。」
抑も此孝子が東京に來た所以は、麽什云ふ譯であるかと聞いて見た所が、之れは先年父は去ぬる十五年に虎列剌で死んだ。其以來母が頻りに藤澤の遊行寺に參詣して其序に、東京諸々の名所舊蹟を見物したいと云ふのが久しい以前からの宿望であつて。で何卒此の宿望を遂げさせたいと云ふ平七の積年の望であつた。當人は先づ一通りの田地も所持て居るし、百姓にしては相應な生活をして居るけれ共、中々名所見物でもすると云ふのには、旅費が容易で無いからして、數年の間心懸けて些かにても、農業の閑暇があれば、人に雇はれたり何かして、金を儲けて而うして、皆夫れを預けておいて、數年の間蓄めたのが、丁度百三四十圓にも成つた。其所で此の金を旅費として、凡そ六十日の豫定で、一日に三圓宛費ふ心算でやつて來た。而あから病氣故障等もあるものだから、甚だ心細く思つたから、實は自分の親類に縣會議員をして居る相應な財產家があるから、其れに話した所が、大に其志を愛で、何時でも電報を發せば、云ふ丈けの金を遣るから、安心して出掛けろと云ふので、夫れに力を得て、愈々出立した。其所で二十二日に始めて、着京して、宮城を最先に拜觀して夫れから、名所〳〵を見物なして、旅宿は芝區三田邊の木賃宿に宿つて居つた。而して一日萬世橋の邊を通行つた處が其車が餘り不潔ないのを巡査が見咎めて其譯を聞いた。斯樣〳〵の次第であると實際を話つた所が、派出所の巡査が大に同情を表して、夫れは左樣云ふ譯であれば、便利の場所に宿つて方々を見物してあるく方が便利であらうからと云つて、派出所から案内をなして與れて、

始めて萬世館と云ふ所に宿をする樣に成つた。而うすると翌日(二十五日)神田の宿屋營業組合事務所から金五圓に感賞狀を添へて贈つた。夫れから、而う云ふ事が新聞に其た所から段々聞き傳へて奇特を賞して、五圓あり、三圓なり、一圓あり、皆諸方から金圓を贈つて來る。其の金員が凡そ五十圓計りに成つた。夫れを見て母が曰く、什麼か之れは無益と費ふべき金圓では無いからして、海軍省に十圓、陸軍省に十圓寄附したいと云出した。夫れは如何云ふ譯で陸海軍省に寄附したいと云ふのかと、聞いて見たら、母の望みに海陸軍の方々は國の爲めに命を捨て丶下さるのだからして、どうぞ其所へ上げたいと云ふので、夫れから願ひを出したら御聞屆けに成つて納めた。夫れから又宿の主人の云ふには、養育院と云ふがあつて、其處には誠に哀れな便り無き兒童を養育する處であると云ふ事を聞いたから、之れには、金を拾圓にお菓子を添へて遣つた。夫れで三十日の日は又芝居見物の案内を左團次と云ふ俳優から受けて見物に往つた。恰度當家へ來たのは、其翌日であつた。先づ聞いた話は此位の物であるが。（遠山いれ子）

○教の栞

●●●●●●●

●檢定出願者注意　去にし五月二十七八の兩日の官報を以て、師範學校、中學校、高等女學校、教員試驗檢定出願者注意ある者、數個條を發布せられたり。即ち、

一今回の試驗檢定は師範學校中學校高等女學校教員試驗檢定並に高等女學校女子師範學校女子部教員試驗檢定の二種に區別して之を行ふ但し前者の試驗檢定を出願したる者に對しては後者の試驗檢定は之を行はす

一習字科、體操科、音樂科、並に數學科の内三角法、解析幾何、微分積分に就きては豫備試驗を行はす

一習字科の本試驗は檢定願書經由の地方廳所在地に於て之を行ふ

一出願學科の一部に就き免許狀若くは證明書を有する者又は出願學科の豫備試驗に合格したる者の試驗檢定は左の區別によりて之を行ふ

●國語及漢文科

一國語又は漢文の免許狀を有し國語及漢文科の試驗檢定を出願したるものには豫備試驗を行はす直に免許狀を有せさる部分に就きてのみ本試驗を行ふ

一國語又は漢文の豫備試驗に合格し國語及漢文科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を行はす直に本試驗を行ふ

●歴史科

一日本史の免許狀を有し歴史日本史東洋史の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を行はす直に免許狀を有せさる部分に就き本試驗を行ふ

一日本史の免許狀を有し歴史科の試驗檢定を出願したる者には日本史東洋史の豫備試驗を省き西洋歴史の豫備試驗及免許狀を有せさる部分に就き本試驗を行ふ

一萬國史の免許狀を有し歴史日本東洋史科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を省き直に免許狀を有せさる部分に就き本試驗を行ふ

一日本史又は東洋史又一部若くは二部の證明書を有し歴史科若くは歴史日本史東洋史西洋科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を行はす直に證明書を有せさる部分に就きてのみ本試驗を行ふ

一日本史又は萬國史亦歴史の豫備試驗に合格し歴史科若くは歴史日本史東洋史科若くは歴史西洋史科の試驗檢定を出願したる者は豫備試驗を行はす直に試驗を行ふ

●地理科

一地誌又は地文の免許狀を有し地理科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を行はす直に免許狀を有せさる部分に就きてのみ本試驗を行ふ

一地誌又は地文の豫備試驗に合格し地理科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を行はす直に本試驗を行ふ

●物理及化學科

一物理又は化學の免許狀を有し若しくは豫備試驗に合格し物理及化學の試驗檢定を出願したるものには免許狀を有せざる部分若しくは未だ豫備試驗に合格せざる部分に就きてのみ豫備試驗及本試驗を行ふ其他の部分は直に本試驗を行ふ

●博物科

一動物又は生理の免許狀を有し動物及生理科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を行ばす直に免許狀を有せざる部

分に就てのみ本試驗を行ふ

一動物又は生理の豫備試驗に合格し動物及生理科の試驗檢定を出願したるものには豫備試驗を行はず直に本試驗を行ふ

一動物又は生理又は動物生理又は植物又は礦物の免許狀を有し博物科の試驗檢定を出願したるものには免許狀を有せざる部分に就き豫備試驗及本試驗を行ふ但し動物又は生理の免許狀を有する者には動物生理の豫備試驗を省く

一動物又は生理又は動物生理又は植物又は鑛物の豫備試驗に合格し博物科の試驗檢定を出願したるものには未だ豫備試驗に合格せざる部分に就きては豫備試驗及本試驗を行ひ其他の部分に就きては直ちに本試驗を行ふ但し動物又は生理の豫備試驗に合格したる者には動物生理の豫備試驗を省く

● 圖畫科

一毛筆畫の免許狀又は證明書を有し毛筆畫用器畫科若くは鉛筆畫の免許狀又は證明書を有し鉛筆畫用器畫科若くは用器畫の證明書を有し毛筆畫用器畫科又は鉛筆畫又は用器畫科の試驗を出願したる者には豫備試驗を行はず直ちに免許狀又は證明書を有せざる部分に就てのみ本試驗を行ふ

一毛筆畫の免許狀又は證明書を有し圖畫科の試驗檢定を出願したる者には用器畫の豫備試驗を省き鉛筆畫の豫備試驗及鉛筆畫用器畫の本試驗を行ふ

一鉛筆畫の免許狀又は證明書を有し圖畫科の試驗檢定を出願したる者には用器畫の豫備試驗を省き毛筆畫の豫備試驗及毛筆畫用器畫の本試驗を行ふ

一用器畫の證明書を有し圖畫科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を省き毛筆及鉛筆畫の本試驗を行ふ

一毛筆畫用器畫科の免許狀を有し鉛筆畫用器畫科若くは鉛筆畫用器畫の免許狀を有し毛筆畫用器畫科の免許狀を有し毛筆用器畫科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を行はず直ちに免許狀を有せざる部分に就て本試驗を行ふ

一毛筆畫の豫備試驗に合格し毛筆畫用器畫科若くは毛筆畫用器畫の豫備試驗に合格し圖畫科若くは鉛筆畫の豫備試驗に合格し鉛筆畫用器畫科若くは鉛筆畫用器畫の豫備試驗に合格し圖畫科若くは用器畫の豫備試驗に合格し毛筆畫用器畫科又は鉛筆畫用器畫科又は圖畫科の試驗檢定を出願したる者には豫備試驗を行はず直に本試驗を行ふ

● 家事及裁縫

一家事又は裁縫の免許狀を有し家事及裁縫家の試驗檢定を出願したる者には免許狀を有せざる部分に就き豫備及本試驗を行ふ

一家事及裁縫科の豫備試驗に合格し家事及裁縫科の試驗檢定を出願したる者には未だ豫備試驗に合格せざる部分に就きては豫備試驗及本試驗を行ひ其合格したる部分に就き直ちに本試驗を行ふ

●體操科

一普通體操又は兵式體操の免許狀を有し體操科の試驗檢定を出願したる者には直ちに免許狀を有せざる部分に就てのみ本試驗を行ふ

●侯爵山内家婚禮式（続）

第三、饗膳、七五三の内にて七の膳まで出して御膳を引て、次に、殿方御料人侍女房何れも七五三の内の三の膳を參らする、是を饗の膳といふ。

一二三と三膳つゝすゑ、御盃三方、又は、足打にすえて出す、此時は盃取かはしあり。

三の膳を畧して、其内の本膳のみを出して直に御湯を出せる、但盃の順序はあるなり。

かくの如く畧したる、膳部の次第を以て考ふるに、漸々に其作法を畧し來れるが如し。扨此時の盃の取かはしが、今度の御式にもかゝはひて、其の今昔の作法の同一にして、世間に誤解されたる小笠原某が名稱を利用して、其實をあげ得ざる小笠原流の如き、亂調あらざるを証するの一端として、其の參考に必用ある所あり。

扨其の作法の昔時の樣は、其の源たる伊勢家の舊記、婚禮法式にくはしければ、此にいはず、今度の作法の次第をあげんに、これにさきだちて、其の作法をあつかりし禮節家の傳統を、畧記するの要あり。

伊勢貞丈—伊勢家三十五代松岡辰方—松岡行義—松岡明義—松岡止波子　以上伊勢家統

水島元成—伊藤幸氏—松岡辰方—　以下同斷　以上小笠原統

小笠原家—伊勢家門人家臣某—水島元成—以下同し

かくの如き傳統を有せるなり。

御肴物の事

御作法につきて、盃事の順序をも委しくあげんと思ひしが、其の次第の男方より初まりて、女方へとつかはさるゝ所の正しき事を、長くのぶるなれば、舊本によつても知る事を得べければ、殊さらに正しき證といひあぐるまでの事にもあらじと、思ひなりぬれば、省きて、其時の御肴物の事を記して、まづはこの婚禮のことをとゞめてんとす。

聟、嫁の御前

第一献　吸物　第二献　硯蓋物　第三献　差味　第四献　茶碗　第五献　鉢肴　第六献　甘煮　第七献　酢物　第八献　羽盛　第九献　水菓子、吸物

折　敷　足打

一進　飯、汁、鱠、煮物、香物。　二進　平皿、猪口、汁。　三進　燒物。　四進　飯鉢。　五進　盛菓子。

此御肴物は、三献の衝重の物の外に、後に酒宴に出されし順序なり。三献の樣は（己に前號に出したれは略く）いはず。又其詳細の品目もこゝにはかゝず。又本膳二の膳などいひて別つべきをも、只一進二進としたるは、其わづらはしきを略きつるなり。こは、我割烹教場の成蹟品を以て、調進せしなれは、委しく記し出んはなかなかに心なきやうなれば、其のかたはしをのみものして、結びおきつ。（石井泰次郎）

●●●●●●●●●●

●女子醫學研究所開設　先頃本郷濟生學舍に於て、突然女子部の聽講を禁じたるより四十餘名の女學生は、途方に迷ひ、或は、教員間に奔走し、或は鈴木万次郎氏等に傳手を求めて哀願しつゝありしが、這回其請ひを容れ、飯盛、曲淵の兩理學士外諸氏の發起にて、神田三崎町一丁目に、女醫學研究所を開設し、去ぬる十五日其の開所式を擧

行せり。尙は本月中に入學の手續を了するものは、束脩を免除すといふ。

●佐伯婦人會　廣島縣下佐伯郡に於ては、尾野、兒玉、谷口、香川、山本、小田、石田、井上、阿鷹、土井、堀内の各婦人發起となり、佐伯婦人會を組織し、去にし廿四日廿日市高等小學校に於て、發會式擧行せられたる由、其の趣意書左の如し、

家庭教育は學校教育と大なる關係を有するものにて其家庭教育は妾等婦女の勤めなれども其素養の無くてはかなはぬ事なり故に今其素養をなさんものをと又妾等婦女にありては何とそ國に報ゆる事の出來ねばいと口惜しき事にこそ責めては其萬分の一にもとて平素會費の一部を貯へ置き國家有事の時又は公共の事にて慈善に渉るものあらんには之を寄贈せんものとて佐伯婦人會なるものを設け其規則を編みたれば世の同感婦女達は此擧を賛け御入會あらんことを望む

明治卅三年十一月　發起人

こひねがはくば、中途にして、止なからんことを。至囑至囑。

●皇孫殿下御降誕奉祝談話會（日本女學校）

五月廿日、さしも雨つゞきありし天氣も、朝來、一點の雲だになく、天、また、この嘉會を喜ぶものゝ如し。午前八時三十分、龍岡町なる校門を出で、四百五十有餘名の教員生徒、列を正して道の左方をねりゆくさま、其の靜肅、其の威儀、平常の薰陶おもひやられて、いとこそ、ゆかしかりしが、九時より十一時迄、小石川後樂園を觀、それより植物園に至りぬ。午餐の後、植物を順覽せしめ、さて茶菓を一同に頒ち、三時、一同、會場に集り、先づ、生徒諸子の奉祝の歌を披講し、次に、西校長起つて、後樂園をつくりし水戸義公の誠忠について、及び、女子平常の心得について、談話せられ、午後四時、再、列を正して、學校に歸りき。もしそれ、植物園にいたりては、人の知ると

ころ、今更に之を言ふをもまたざるべし。後樂園の記事は、同人螢雪子、諸書を博引旁證して、其の詳細をいたし、これを樂園欄にをさめたれば、こも、亦、こゝにいはず。(蘭生)

●禮法講習會發會式

五月廿四日有樂町なる神宮奉齋會にて、禮法講習會の發會式を舉げられたり。神田息胤氏、開會の辭を述べ、次に婚禮の式法ををさめられたり。これは、嘗つて、細川潤次郎氏の立案せられたるに神前に祝詞をさゝげ、誓の詞をよむこと、加へたるなりといふ。簡にして、而かも能く、其の禮を盡せるが如し。次に、某氏の祝辭あり、下田會長の演説を卒へて、餘興にうつりぬ。第一には、佐野天徳寺を泣かしめしといふ宇治川の平家琵琶ありき。次に望月の能に狂言素襖落。岩船の祝の能にて午後六時閉會せり。會場の整理、來賓の接待等行屆まで遺憾なかりしも、たゞ、來賓諸氏の定の時刻に後れて來られし人のおはかりしは、禮法講習會の名に顧みて、頗る、不快の念を禁ずる能はざりき。講習會は、よろしく、まづ、これらの禮についても、世人を警醒せむことに注意せられむことを望まざるを得ず。(三石直子)

●全國各女學校卒業生(第三回)

●●●●●●●●●●●●

●市立大阪第一高等女學校　の第十四回卒業證書授與式は、例により、去にし三月二十八日午前九時を以て、舉行せられ、菊池知事、田村市長、知事令夫人、西澤書記官令夫人、安河内參事官令夫人、及び府内各學校長等の來賓ありき。其の證書授與式の順序及び卒業生は左の如し。

第一號鐘にて、職員生徒式場に入り、第二號鐘にて、來賓臨場、而して奏樂合圖にて一同敬禮、次に校長御眞影前に進み、また奏樂合圖にて一同最敬禮、終りて、君が代の合奏、續きて校長は謹みて勅語を捧讀し、次に校長の報告、證書賞品の授與、及び告辭、知事、市長の祝辭、卒業生總代の答辭、終りて卒業式唱歌の合奏、次に校長再び御眞影前に進み、また奏樂合圖にて、一同最敬禮、次に一同退場せり。

●卒業生姓名（イロハ順）

今井　エム　生田　光　市川　ハナ　池田ゆきゑ
岩崎　モト　秦　こさ　原　松　萩原　スガ
長谷川サダ　長谷川トメ　橋本　いし　橋本　ケン
西野　ソヨ　西澤　テル　堀　[illegible]　堀内みつゑ
戸田　れん　富永　トシ　岡林　直樹　岡村　ルイ
小倉　[illegible]賀　岡島　セン　岡本　房野　渡邊かをる
渡邊　[illegible]　和氣　道子　川端　セツ　川口　トミ
鎌田　アイ　吉田美代子　吉田　ヒサ　吉山　章子

谷田　ハツ　高田　ツ子　高野　春　辰巳　すゑ
田邊　竹　田中　ろく　田中　禎子　竹中　豐
宗　福　筒井　千代　辻　アイ　内藤ゆきゑ
中川しづこ　中谷　ヤソ　中塚　清枝　中澤　靜子
梨羽　操　牟禮　喜勢　村田　サキ　上田　光枝
井口　チエ　野田　セン　野口　まさ　大村　チヨ
奥野　文子　御野　カジ　桑原　順子　山中　モト
山岸　好　保田　チカ　松村　きみ　松本はるゑ
増田　マス　藤川　つる　藤江　曾能　小林　ヤス
後藤　キヨ　小松　トヨ　江藤　靜　寺田　信江
寺澤　靜　青木　シノ　足立　花　三枝　常
酒井　ケイ　佐藤　シナ　佐々木千代　佐々木コト
水原　しん　木村　照　木村　榮　紀井　光
柴藤　セイ　島田　アサ　清水　セイ　下里　ラン
姫岡　セイ　森田　艶　森田　セツ　杉山　ちう
杉本　マス

以上、本科九十三人あり。

今村　きよ　初井　あや　西村　まき　奥田　よし
沖本　かよ　和久　あい　梶　みれ　河野イハホ
合田　芳惠　高橋ふみ子　谷　ふく　中村　まる
內山　みち　井筒　つぎ　井上　きま　岡田　千代

杭全　しう　　山上　ちか　　山崎　いり　　松井　つる
藤井ヨシヘ　　三枝　たま　　木村　重子　　久留　千代
鈴木　のぶ

以上、技藝專修科二十五人なりとぞ。

●日本女學校の地久節祝賀

五月廿八日の地久の嘉節には、午前八時三十分に職員生徒總べて式場に集り、遙に宮城の御方を拜して、皇室の萬歳を祝し奉り、次に教育勅語を奉讀し、地久節の唱歌について、校長は、御坤德のたぐいなき御事を、一時間も演説せられたり。(其の詳細は、次號の精華欄に掲ぐべし。)これについて、下田義天類氏は、雄略天皇の后の宮について其の御盛德を談話せられ、君が代の唱歌を以つて其の式を終へたり。

○杜鵑一聲

●中島湘煙女史逝去　肺病を以つて、久しく大磯に療養中なりし、故中島信行男未亡人俊子は、廿五日午後一時十五分逝去したり。享年三十九、葬儀は三十日大磯大運寺に於て執行せし由、女史本姓岸田氏、父は元但馬豐岡の人、女史は其長女にして、幼より才氣あり、十八九歲の頃宮中に奉仕せしが、幾もなく辭して立憲政黨に投じ、大阪を始め九州各地に遊說す。閨秀雄辯家として到る處尠なからぬ注意を惹けり。時に明治十五六年の頃なりき。其の東京に還るや、時の自由黨副總理中島信行氏と相知りて交淺からず。小說『善惡の卷』は當時の著述に係れり、後ち容れられて中島氏夫人と爲るや、亦た久しく政論壇の人たらず、專ら力を內助に致せり、女史の容貌は、敢て秀麗と稱する能はざるも、何處となく奧床かしくして、辯舌滑轉、天性書を能くし、兼て作詩に長

す、女史亦た當代閨秀中の一偉才たるを失はざりしが、今や則ち亡し嗚呼可惜哉。

●渡邊洪基氏逝去

久しく赤十字病院に於て、治療中なりし渡邊洪基氏は、病勢頓に革まり、終に廿五日午前二時十五分に長逝したり。享年五十五。葬儀は、二十七日午後二時芝佐久間町の自宅出棺、麻布笄町長谷寺に於て、執行せられたり其の路歴次の如し。氏は、舊福井藩士なり、弘化四年二月を以つて越前武生に生る、家は世々醫を業とせり。氏幼より蘭學を修め、文久三年下總國佐倉に赴きて、佐藤尚中翁の門に理科學を講習し尋で江戸に出で、開成所慶應義塾等に遊びて、英學を學び、明治二年大學の少助教に任ぜられ、爾來外務省、大政官等に出仕し、明治十五年元老院議官となり、次で工部少輔に轉じ、同十八年東京府知事に任じ、同十九年帝國大學總長より轉じて墺國、瑞國公使となり、同廿五年東京府第二區より撰ばれて、衆議院議員に擧げられ、同卅年貴族院議員に勅撰せられ、錦鷄間祗候たり。本年四月東京帝國大學名譽教授となり、又特旨を以て正三位に叙し、勳一等瑞寶章を授けらる。昨年九月、伊藤侯立憲政友會を組織するに當り、創立委員となり、次で總務委員となり、實業界にも種々の關係を有して重望を負ひたりしが、今や則ち亡し、可惜哉。

●水道鐵管の有機體

在るべきにあらざる者があるとは、さても、いぶかし。此頃來水道より、蛭、蚯蚓の蠢蠕、或は、軍をなし、或は、單身にして都下至處に出沒し、其の數幾百なるを知らず、以て百余萬の人心を寒からしむ。嗚呼、特に衛生を重すべき今日、かゝる珍事を來たさしめたる、果して誰の罪なるか。

●●●●●ペスト來　水道鐵管の有機体につき、其の原因、未だ確實ならざるに、最も恐るべき黑死病菌は、俄然、東京大學醫科に顯れたり。されば、撲滅の良法として、捕鼠の必要あれば、先例により市役所に於ても、鼠買ひ上に決し、夫々訓令を發せられたり。

又警視廳に於ては、廳令として、家宅以外を跣足にて歩行するを禁じ、違反者には、相當なる制裁を加へ以て、傷口よりペスト菌侵入の豫防にすとそは兎に角互に注意し、些少のカスリ傷だに作らざる樣、又、身体及び、衣服の清潔を怠るべからず。

●●●●花あやめ　江戸紫の藤の花、ゆかりの色を讓りて、世は、菖蒲杜若の好季節とはなりぬ。南風かをる池の汀、白に紫に咲き出でゝ、水にうつる樣の愛らしさ。

●●から衣きつゝなれにしつましあれば

●●はるばるきぬるたびをしぞ思ふ

と、三五中將が、嘗、三河の八橋にて詠せられたる昔も思ひ忍ばれぬ。されど今は、武藏の堀切こそ本場の如く武藏屋、小高園、吉野園など、競ひて珍らしき新花を培養し、風雅人の樂しみとはなすに至りつれ。

○口繪につきて

●●●●●湯地都尾子の像　前號に豫告したる如く、こは、精華欄に於て、田山子が物したる、史傳をかゝげたれた、參照せらるべし。あはれ、愛兒の研學を督しつゝある温容の床かしさ、其の情の濃なる樣、勃如として紙面にあふるゝが如けんかし。

●●●●●雲濱の眞蹟　は、本紙漫錄欄にかゝげつゝある一夕話中の主人たる、士の姪山田富子女史の藏する處なり。記者一日、女史の宅を訪問し、特に

諸媛のために拜借し、以て寫眞版に命じたる者、即ち卷頭の筆蹟なり。あはれ、其の筆の稜々たる字々悉く志士が至誠の躍如たるを見る。

梅田雲濱は京師の儒者、名は定明、一名を義質と云ひ通稱を源二郎と云ふ。湖南は其の號、されど、雲濱を以て世に鳴る。若狹小濱の藩士矢部岩十郎の子なれど、出でゝ同藩士梅田万兵衛の家を嗣ぐ少壯にして、和漢の典籍に通じ、闇齋學派の逸足を以てきこゆ。最も詩文、和歌を能くし、又、書に工なり。嘗て藤田東湖、佐久間象山、藤森弘庵高杉晋作、久坂義助、橋本左内、賴三樹、梁川星巖、淸川八郎、日下部伊三次、安積五郎、妙圓寺淸狂等と交りよく、志氣慷慨、夙に憂國の念を抱き、尊攘の説を唱へ海防の策を主張し、大になす處あらんとす。其の切齒慨歎の餘り、懷抱をうつしては、

天の戸をおし明け方の雲間より
　　てらす日影の曇すもがな

の三十一字となる。嗚呼天高くして、志士の至誠を揣ざるか、安政五年三月幕府の爲に縛せらる。時に、病牀にあり、乃ち、筆を呼て、臥室に題す曰く、

身在病牀兒叫飢。　此心偏欲掃戎夷。
如今死別兼生別。　只有皇天后土知。

此の年十二月、賴三樹等同志二十餘人と共に、江戸に檻送せらる、即ち和歌を詠じて、自死を期す。

君が代を思ふ心のひと筋に
　　わが身ありとは思はざりけり

已にし幕吏等、拷治甚だ嚴なり。或は鞭を加へ、或は石を抱かしむ。雲濱病軀堪ゆる能はず、終に翌年九月小倉藩の獄舍に死す。年四十四、明治年間正四位を贈らる、志士以て瞑すべし。(超州漁史)

○次號豫告

揮毫　黑田子爵

記者、一日、麻布區笄町なる、子爵閣下の邸に參り、特に、本誌のために染筆を希ふ。子、銀鬚を撫し莞爾として曰く、諾と、其の巧妙なる和歌と、流麗たる書とは、能く、子爵が至誠温厚の君子たるを明きらかならしむ。

群芳　學校生徒

こは、柳河高等女學校生徒、小柳、立花、德永、下川等四子の、ものしたる毛筆書にして、同校より特に、寄贈せられしものなり。花あり、鳥あり、魚あり、山あり、其の書の如何は、こゝに云はず。請ふ次號を待て。

女子の學問　岸田松一郎

氏は、着實ある敎育論者なり。頃日感ずる處あり、以て、女子の學問てふ一編を草し、諄々數千言、悉く肺肝より出づ、其の論鋒の銳利ある、諸媛乞ふ、刮目してまて。

其の他例により、記事豊富、擧るに遑あらず。

女鑑歌文月次兼題

六月廿日分

歌　旅中梅雨
文　某瀑布に遊ぶ記
右六月九日〆切

七月五日分

歌　蓮露
文　轉地療養中の友に送る文
右六月廿四日〆切

七月廿日分

歌　松下泉
文　水邊納涼の記
右六月九日〆切

八月五日分

歌　閑居荻
文　暑中見舞の文
右七月廿四日〆切

讀賣新聞社編



定價金五拾錢●郵稅金六錢

菊判全一冊紙數二百數十頁總ふりがな附

此書は當今名流諸家の家庭教育に關する實例を編纂したるものにして其字句の平易なる其行文の流暢なる何人も讀むを得べく且つ其事柄は一々名家の實話に依て記したれば一も空想に馳せず宛も春風の駘蕩秋霜の嚴烈なるが如く寬嚴其宜しきを失はず以て家庭教育に關する著作中多く其右に出づるものなきを知るべし今や風敎漸く紊れて一國の綱紀將に危からんとし子女の將來誠に痛心に堪へざるものあり世の父兄たるもの是非とも本書を備へて旦夕の殘規とするの必要あるのみならず教育家たるもの必ず一本を購讀せずは子女教育の責を空くすべし

本書の目次

發行元 東京市神田區[illegible] 文友館●大賣捌 東京市神田區表神保町 東京堂書店

小野満智子著
後藤芳景先生畫
（密畫入頗美本）

容顔艶麗 美人法

全壹冊 正價貳拾錢 郵税貳錢 郵券代用壹割増

人生れながらにして卅二相揃ひたる眞美人は稀也その化粧の巧妙と服裝の好配とによりて美人となる著者は多年の實驗にて化粧及服裝の仕方にて色の黑きも白くなり鼻の低きも高く見え額の廣きは狹くなり口の大なるも小さく見せ背の低きは高くなり目尻の下りたるを上りて見する等其他數多の秘法は圖畫を以て之を示し加るに『男女平素の心得』を附せり本書を一度播く時は醜は美に美は益々美を加ふ實に稀世の至寶也

發行所 東京京橋區中橋和泉町四番地 藍外堂

日本名勝圖譜

第一期 出版之部 壹帙

教科參考用 地理歷史標本 三拾六枚入に限り説明刷添 寸法竪九寸正巾一尺一寸 價金貳圓貳拾五錢 壹枚賣金七錢宛小包郵税十里迄金五錢百里迄金八錢百里外金拾六錢爲替神田局宛

目次

本圖譜は各地學校之に勸誘に基き中小學用教科書に依り編製し弊社特有之鮮明不變色なる寫眞版に刷成したる最も斬新に最も適切なる寫眞圖にして地理上歷史上著明なる名勝故蹟等を網羅したるものなれば坐らにして山水の勝を探り風光の美を察するを得べく或は歷代興廢の跡英雄存亡の蹟を追究するに足らん即ち教授上唯一の標本たるは勿論又た繪畫彫刻漆工鑄冶諸家の標本として座右實に欠くべからざるの資料たらん茲に

購客の便を計りて**豫約方法を設く** 豫約特別減價**金貳圓** 豫約申込期限は六月拾五日限り

豫約御申込は**前金を要せず**（但し御住所を詳記したる御調印の御申込書を要す）

六月廿日より御送金順序に依り冊子御送達可申事

發行所 東京市神田區連雀町十八番地 **畫報社**

豫約御申込所 美術畫報發行所

明治三十四年六月五日發行

女鑑

每月二回五日廿日發行 第貳百參拾號

明治廿五年三月三十日 第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷